
ミノタウルス

阿万之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミノタウルス

【Nコード】

N5035Y

【作者名】

阿万之

【あらすじ】

八人は気がつくと殺風景な部屋にいた。彼らは何故こんなところに連れて来られたのか疑問を持つ。やがて、ここが地下迷宮だということがわかる。彼らはここから抜け出そうとするが、なかなか上手くいかない。そんな中、八人の一人が迷宮の中に怪物が出たと言い始める……

登場人物紹介

拉致された八人の男女

田辺義男

迷宮に連れてこられた二十一歳の男

加藤春人

迷宮に連れてこられた男。六十三歳。

野々宮沙智子

迷宮に連れてこられた十八歳の少女

横井勉

迷宮に連れてこられた男。二十五歳

富士野満雄

迷宮に連れてこられた男。勉とは親友同士。二

十五歳。

水野瑠美子

迷宮に連れてこられた女。二十五歳。

西岡

迷宮に連れてこられた女。六十一歳。

沢登

迷宮に連れてこられた男。三十七歳。

管理人

正体不明。

ミノタウルス

正体不明。

一章 迷宮案内 序

ここはどこだろう、田辺義男は考えた。俺はこんなところで何をしているだろう。

殺風景な部屋に義男はいた。ベッドに、義男は横になっていたよ
づあ。

義男はベットから起きた。薄い青色の壁に手をやってみる。ざらざらした手触り。まだ真新しい。辺りを見回す。小さな部屋に、ベットと机それに机の上にパソコンのモニターと隣にパソコン本体が置いてある。壁には時計があり、時刻は午前九時五分。それに扉がある。義男は何も考えずに扉を開けた。扉は開き、その向こうには壁が見えた。左右にはどこまで続いているのかわからない通路が奥まで続いていた。義男は扉を閉めた。

わけがわからなかった。気づいたら、ここにいて、その前後の記憶がない。義男は最近の出来事を思い出してみた。仕事にいき、帰り、仕事に行き、帰る。特別変わりようがない。一体誰が俺をこんなわけのわからないところに連れ込んだんだ？ 義男はパソコンを見た。もしかしたらこの中に、何かヒントがあるかもしれない。当然のように義男はそう考えた。義男は椅子に腰掛け、パソコンの電源を入れた。モニターが光り、ウィンドウズが立ち上がった。しかし義男にはこの先どうしていいのかわからなかった。どこを見ればいいのかだろうか、さっぱりだった。義男は電源を消した。

とにかく外に出よう、と彼は考えた。この建物の中から出るのだ。彼は扉を開けて通路に出た。通路は明るい。天井に明かりがついている。考えてみれば今いた部屋にも電気がついていた。今は夜なのだろうか、窓がないからよくわからない。彼は歩いた。通路を進む。左手に扉が見えた。義男は早速その扉の中に入った。

扉の中は先ほど義男が目覚めたときにいた部屋に似ていた。とい

うよりもそっくりだった。違うのは部屋の真ん中に少女が立っているということだけだ。少女は義男が入ってきても格別驚いた顔をしなかった。黒髪の少女。全体的に整った顔をしていて、清楚な雰囲気があった。化粧はしていなく、素の顔だったが、白くなめらかな肌は美しかった。

義男は戸惑った。なんと声をかければいいのかだろうか。しかしそんな心配は杞憂に終わった。少女のほうから声をかけてきたのだ。「この人ですか？」少女が聞いてきた。脅えた顔をしている。

「いや、違う。何でここにいいのかわからないんだ。ここどこなんだろ？」義男も聞き返した。

「わかりません。気がついたらここにいたんです」少女が答える

「それじゃ、俺と同じじゃない」

「そうなんですか」少女の表情は変わらない。

義男は仲間を発見したと思った。この少女も自分と同じく、わけがわからずに気がついたらここにいたという立場。しかし仲間が見つかったからといって、何か変わるわけではない。早くここから出ないと。義男は自分の部屋にもあったパソコンのモニターに目を付けた。

「パソコン、立ち上げてみた？」

「はい。だけどインターネットに接続もできないし、ほとんど何にも使えないみたいなんです」

「そっか……ずっと部屋にいたの？」

少女は部屋の周りを見回した。「目覚めてからは、はい、ずっといたここにいました」

「外に出て一緒にここから出よう」義男は少女を誘った。

「だけど、大丈夫なのかな？」少女が眉間に皺を寄せる。

「何が？」

「うっん、もしかしたら何か理由があってここにいるのかもかもしれないと思って」

義男は考えてみた。確かにその可能性はあるが、だがこんなとこ

るにいるよりも彼は一刻も早く家に帰りたかった。

「大丈夫だと思う。もし俺達を部屋から出したくないならそれを促すような貼紙でも貼っとくはずだろ」

少女は義男の言葉にうなずき、外に出た。長く無機質な通路の様子に戸惑っているようだ。二人は歩き始めた。しばらくお互いに口を聞かずに歩いていたが、知らない者同士なのだ、何か話して交友を深めるべきだと義男は考えた。

「名前はなんていうの？」

「野々宮です」少女は予想していた質問だとばかりに即答で答えた。

「野々宮ね、下の名前は？」

「沙智子。なんて名前なんですか？」沙智子が逆に聞いてくる。

「田辺義男」しかしこんな状況で自己紹介か、と義男は自嘲した。

「歳は？」義男が聞いた。

「十八です」少女が答える。

「じゃあ高校三年生？」

「そうです」

「俺は二十三歳なんだ」

「お仕事されているんですね」

「うん。とある中小企業で」

「そうなんですか」

会話は途切れた。義男は仕事のことを考えていた。記憶があつた最後の部分が会社から家に帰るところだった。車の中で鼻歌を歌っている自分がある。それから全く記憶がない。今日が何日なのかもわからない。義男は携帯電話があれば、日にちがわかるのにも思つた。しかしポケットには何も無い。財布すらも。

「ここにはどうやってきたか覚えているかな？」

「全然。気づいたらここにいたんです」

「俺もそう。記憶がぼやけているんだ。なんだかわけがわからない」

野々宮沙智子は難しい顔をした。「少しだけ覚えているんですけど、通学途中のことだと思っただんですけど、黒い車が横に近づいて

きたってことだけ覚えているんです」

黒い車。義男は何か奇妙な不安感に襲われた。俺はもしかしたら、誘拐されたのだろうか？　だが目的が見えない。それにここは一体どこなんだ。

二人は右側の壁に扉があることに気づいた。さらに通路に奥にくくと突き当たりにも扉があった。

「どうしよう」沙智子がつぶやいた。

義男は迷うことなく右側にある扉を開けた。扉の先はまた、先ほどの少女の部屋と似たような光景だった。違うといえばベッドに男が眠っていることだろうか。

男は小さな寝息を立てて眠っている。髪は白髪で、顔も手足も皺だらけでかなりの高齢に見えた。黒い、大きめのTシャツ。下には白のゆったりしたパンツを穿いている。年のわりには若者のような格好だ。一体この老人は何者だろうと二人は考えた。男は全身日に焼けているように色黒だった。

男の寝息が止んだ。それから目がゆっくりと開き、義男たちに向けられた。

「お前らは何者だ？　私を攫って何の得がある？」男の声は敵意に溢れていた。しかし男は二人を見て、驚きの表情を浮かべた。男は上半身をゆっくりと立たせ、まじまじと義男と沙智子を見つめた。

「あんたら、もしかして俺と同じでここに連れ去られたんじゃないだろうな？」男が聞いてくる。

義男はうなずいた。

「たぶん、そうです。記憶がないからよくわかりませんが」

「あつという間のことだったんだろうな」老人は起き上がった。老人は百七十センチの義男よりほんの少し背が高かった。「さて、君たちは何故この部屋にきたんだ？」

「扉があつたから、入ってみたんです」義男は素直に答えた。

「なるほど。連中はここにいるのか？」

義男には連中というのがわからなかった。

「思い出した」沙智子が突然言った。「黒い車に乗った男達。黒ずくめのスーツを着ていたあの男達。こつちを捕まえようとするから、抵抗したけど、捕まって、それから……」

義男は黒ずくめのスーツというのに反応した。そして義男も全てを思い出した。

仕事帰り、家まで近道の峠道を走っているとき、一台の車に追いつかれた。車は目の前で止まった。何か自分に用だろうか、と考えた義男は不安になりながらも車を停止させる。前方の車の中から何人かの男達が出てきた。黒ずくめのスーツを着た。義男は男達に捕まり、口に何かを当てられ……。

「思い出した。やっぱり誘拐されたんだ！」義男が叫ぶ。

「そうだ、私達は誘拐された。だけど何のためになかな？」老人はそういつて扉を開けて通路に出た。二人も続いた。

「私の名前は加藤。よろしく。二人の名前は？」

二人はそれぞれ自分の名前を言った。

「さ、いこう」老人は言ったが、老人は義男たちが歩いてきた道を引き返そうとするので慌てて止めた。老人は笑った。

「俺にはここがどうなっているのかさっぱりだ。先導を頼む」

義男とて似たようなものだったが、とにかく義男は先頭を歩いた。すぐに突き当たりになり、目の前には扉があるのみだった。

「開けるしかないだろうな」加藤が言う。

義男は扉を開けた。

開けた場所に出た。縦横に広く、真ん中には自動販売機が並んでいる。両端には駅のプラットホームにあるような赤くあまり座り心地のよくなさそうな座席が並んでいた。天井にはモニターが取り付けられてあった。

そして広場には三人の男女がいた。

「誰だ？」背の高い、黒いニット帽に青い縁の厚めの眼鏡をかけた

男が言った。その隣にはこれまた体が大きく、少し太り目の男がいた。体をすっぽりと包むクリーム色のパーカーを着ている。ぼつちやりとした顔をしているが、男の目は鋭かった。そして女は黒いワンピースを着ている。露出している肩や腕は細いが、豊満な胸をしていた。三人とも年若い。

「私達はここに強引に連れられてきたものだが、君たちこそ何者だ？」加藤がはつきりとした、凄みのある口調で言った。

「俺達もおんなじさ」黒いニット帽を被った男は明らかにほつとした顔をした。

「他にもまだいるんじゃないでしょうね」ワンピースの女が言う。

「なあ、とりあえずここから出ようぜ。埒明かないだろ」太り目の男が言う。それから男は加藤を見た。「すみません、そっちの扉から出ることでできない？」

「わからない」加藤が答えた。「とりあえずこつちにきてみたが」

義男は奥にある扉を見た。「向こう側はどうなってるんですか？」
「わかんない」女が答えた。「気づいたら小部屋にいて、それで部屋をでて廊下をずっと進んだらここに出ただけど……」

「反対側にはいつてないからな、わからない」太り目の男が言う。

「なら、いつてみようじゃないか」加藤が言う。

「仕方ねえな」帽子の男が立ち上がり、奥の扉を開けようとしたが、開かない。

「どうなってるんだ？」男は無理に取っ手を引っ張ったり、ドンドンと叩いてみるが、扉は全く開かない。「畜生、なんで閉まってるんだ？」

義男は振り返った。背後でも似たような音が聞こえた。見ると沙智子が、今自分達が入ってきた扉を開こうと躍起になっていた。

「駄目、こつちも開かない」沙智子が青ざめた顔をして言った。

六人に緊張が走った。義男が考えたのは、今からここに毒ガスが流れる、ということだ。ガスは天井から噴出し、やがて充滿する。終わったころには眠ったように横たわる六人の死体があるだろう。

しかし、義男の予想とは全く違うことがあった。何かの音が聞こえた。六人はすぐにそれが何かわかった。天井にあるモニターの電源が入った。

それで？ 義男は思った。一体どうなるんだ？ 六人はそれぞれモニター画面に視線を合わせた。

モニター画面の中に字が映っている。そこにはこう書かれていた。

ようこそ、地下迷宮へ。ここでは迷路のように入り組んだ通路が全体に広がっています。あなた方八人はこの地下迷宮に住む権利が与えられました。永遠にこの迷宮の暮らしを満喫してください。

尚、もしこの暮らしが気に入らない場合、ここから出ていただいても構いません。ただしこの出口を見つけるのは至難の技です。それに通路にはたまに猛獣や怪物がでます。十分ご注意ください。

食事は各部屋に用意させて頂きます。最初に目覚めた場所がそれぞれの部屋となっております。食事時間は午前七時、昼十二時、夜八時となっております。

各々方が健やかな日々を送ることを願っております

管理人より

自己紹介

「なんだ、これ？」誰もが思ったことを口にしたのはニット帽の男だった。

老人がため息をついた。「どうも、厄介な事に巻き込まれたみたいだな」

「これは何の冗談なの？」黒いワンピースの女がつぶやいた。その顔は脅えきつている。

「嘘だろ」太った男は呆然としている。「ここですつと過ごせつて？ ありえねえよ」

義男は沙智子を見た。沙智子も茫然自失といった顔をしてテレビに映る言葉を見ていた。無理もない、これはどう考えても異常すぎる。永遠にこの迷宮の暮らしを満喫してください。永遠にこの迷宮の暮らし。永遠？ ふざけるな……。

ニット帽の男が人数を数えている。彼は数え終わるとまたテレビを見た。「おいおい、今この部屋には六人しかいないぞ。あと二人はどこにいるんだ？」

「確かに。テレビでは八人と書いてあったな」加藤が言う。「あと二人、この……地下迷宮とやらのどこかにいるということかな？」

「だけどき、扉が開かないんだぜ、どうしろってんだよ」小太りの男が、もう一度確認してみようと扉のノブを回した。しかし扉はやはり開かない。男は扉を蹴った。

「大丈夫？」義男は側で脅えきつた顔をしている沙智子を慰めようと声をかけた。沙智子は青い顔を義男に向け、ゆっくりとうなずいた。全然大丈夫そうじゃないな、義男は思った。「すぐにここから出れると思うよ」何の根拠もなく義男は言った。

「それならいいけど」少女の顔に希望の色は浮かばなかった。義男としてはそれ以上のことは言えなかったのでとりあえず少女のことは放っておくことにした。

「なあ、これからどうすればいいと思う？」加藤が義男に聞いてきた。「私のような老人にはさっぱりだよ」

「俺だって、さっぱりです」義男は答えた。

「うん。だけど、何か手はあるはずだ。ここから抜け出すな」

義男はうなずいた。しかし今はどうしようもない。扉は鉄の扉だ。木の扉じゃない。壊すことはほとんど不可能だ。義男は部屋をうろつき、そして自動販売機に目があった。呑気にジュースなんて飲んでられるか、と思ったが、喉がからからに渴いていた。何時間かはわからないが、今までずっと寝ていたんだ。体が水分を求めているも無理はない。義男は自動販売機に近づいた。自動販売機は八台あり、ジュースだけでなくタバコ、酒まで売っている。義男はペプシコーラを買おうとして、コーラ缶の下に書かれた数字を見た。数字は0だった。義男はそういえば財布を持っていないことに気づいた。義男はそのままボタンを押した。缶が落ちる音がした。義男は手を伸ばしてコーラを手にとった。タブを外して飲む。喉に潤いが与えられた。乾きが収まり、義男はとりあえず満足した。喉の渇きが収まると今度は腹が減ってきた。

「なるほど、タダで手に入るといわけか」加藤が隣で言った。加藤もコーヒーを取り出し、煙草を取った。そしてジーンズのポケットを探り、少し困った顔をした。「誰かライターを持っていないかね」

「ほれよ」太り目の男がライターを加藤に投げた。加藤はライターを受け取り、椅子に座ってコーヒーを一口飲んだ後、椅子に灰皿が置いてあるのを確認し、煙草をうまそうにふかした。「何をともあれ、煙草を吸うことはできるというわけだ」

「おじさん、結構気楽だな」ニット帽の男が笑った。

「じたばたしても始まらないようだしな。お前さん、名前はなんてんだ？」

「俺？ 横井勉。それでこっちは富士野満雄」男はわざわざフルネームで答えた。

「私は加藤だ。下は春人。なんだ、二人は知り合い同士かい？」
「そう、俺と勉は高校からの友人だ」小太りの男、富士野満雄が答えた。

「知り合い同士は俺達だけ？ そのカップルさんたちは？」横井勉が言った。

「俺達だつてさつき会ったばかりですよ、俺は田辺です。それからこっちが野々宮さんです」義男は答えた。

「野々宮沙智子です」沙智子が言う。「私、早く家に帰りたいです」

「それはここに連れ込んできた奴にいつてくれよ」勉が言った。

「お嬢さん、お名前は？」加藤が黒いワンピースの女に聞いた。

「水野瑠美子」女がぶつきらぼうにフルネームで答えた。自己紹介なんてしている場合じゃない、といった顔つきだった。

加藤はタバコを吸い終え、灰皿を落とした。彼は目を細め、どこか遠くを見つめるように奥にある大きな扉に目を向けた。

「あれが開けばいいんだがな」彼はつぶやいた。

「あんな馬鹿でかい扉じゃ押ししても引いても開かないな」小太りの満雄が扉に気づいたようだった。

「どの扉も閉まっているのにどうしろってんだよ」黒ニット帽の男、横井勉が叫ぶ。「こんなところにずっといられるかよ」

「やめてよ、イライラする」水野瑠美子と名乗った女が勉を一喝した。勉は瑠美子をじろりと睨んだ。

「あんたは平気なのかよ？ こんなところに、閉じ込められてさ」

「平気じゃないけど、わめいたって仕方ないじゃない」

「他にやることが何もないんだよ！」

「だから、イラっとするからやめてっていつてるの」

「わかったよ」勉がそう言って目を瞑った。

「みんな、不安だろうが、とりあえず何もできん。しばらく様子を見よう。それで何も起きなかつたら扉を叩き壊す手段を考えよう」

加藤が言った。

「でも、鉄の扉だぜ？」満雄が言う。

「だから、後で色々と考えてみよう」加藤は言い、それから全員が黙った。加藤の提案どおり、しばらく様子を見るということにしたようだ。義男は沙智子が心配になった。この中では一番気が弱そうな彼女は人形のように大人しくしている。守ってやりたい、と義男は思った。こんな感情が生まれたのはひさしぶりだ。

六人は椅子に腰掛け、時間が過ぎるのを待った。時々、勉と満雄が喋りあう声が聞こえる。義男は眠くなってきたので、沙智子の様子を心配しながらも眠りに船をこぎ始めた。夢の中で彼は暗い夜道を歩いている。その目の前には人が数人こちらに歩いてくる。彼らの進むほうは外灯があり明るかった。そして義男を振りかえり、意味深な目を向ける。なぜそんな顔をするんだろうということところで目が覚めた。

他の五人は眠っているようだ。どうやらいよいよ老人の言うとおり、扉を壊す努力をすべきときなのかもしれない、と義男は考えた。と、義男は沙智子だけが眠っていないことに気づいた。沙智子はじつと目の前を見つめていた。沙智子の目線の先には大きな扉があった。

「ずっと起きてたの？」

義男が尋ねると沙智子がゆっくりと振り返った。

「義男さん、ずっと寝てたね。私は眠る気になんて全然なれなくて」沙智子の目は、こんなときに眠るなんていい根性してるわね、と言っているように聞こえた。

「こんなときでも眠れるものらしいね」義男は軽く笑った。「沙智子ちゃんが見張っててくれてよかった」

沙智子は愛想笑いをした。そして義男に真剣な顔を向けた。細いが、はつきりとした眼だと義男は思った。その目だけで沙智子が必死なのがわかった。何か重要なことを言うつもりだろうか、義男は身構えた。

「あの、トイレって……ないんですかね」

「トイレ？」

「その……はい。トイレにいきたいんです」

義男は戸惑った。確かに、ここには自動販売機と椅子しかない。水分だけは好きなだけ取れるのに、便意を感じたときにそれを排泄できる設備はどこにもないのだ。

「部屋にいけば、あるんだけど、困ったな」

「ごめんなさい。でも、こう時間が経つと」

「いや、沙智子ちゃんだけの問題じゃないよ。まいったな、コーラなんて飲まなければよかった」義男も焦ってきた。尿意を感じたらどうすればいいだろうか？ 見ず知らずの連中に見られながら隅で排尿しろとでもいうのだろうか。

「冗談じゃない」義男は沙智子にも聞こえないほど小さくつぶやいた。

「え？」

「いや、なんでもない。困ったな。まだ我慢できる？」

「少しなら」

「もう少しの辛抱だよ」その根拠はなかった。いざとなったらジュースの缶かビール瓶の中にでもするしかないだろう、と義男は思った。女にとってはかなりの屈辱のはずだ。いや、男だって、少なくとも義男にとっても屈辱だった。しかし、膀胱炎になるよりはましのはずだ。

そのとき、突然扉が勢いよく開き、その音を聞いた義男と沙智子はびっくりして開いた扉を見た。寝ていた四人も飛び起きた。

八人の仲間

「開いたのか？」驚きの顔をして満雄が言った。

扉から現れたのは小さな男だった。身長百五十数センチ、といったところだろう。男は肩を落とし、背中を少し丸めている。陰気な顔をした男のまるで世の中を全て否定するかのような目がじろりと六人を見廻した。

「お前らは誰だ？」男が言った。低く、特徴的な声だった。「俺をどうしてこんなところに連れてきた？」

男の声は段々と上がっていき、フロア全体に響き渡った。男の目はやたらと大きく、ぎよろぎよろしていて義男は薄気味が悪いと感じた。

「あんた誰だ？」勉が問う。

「とぼけるなよくそつたれ。お前が、お前たちが俺をここまで連れてきたんだろう」男は目を爛々と輝かせて叫ぶ。

「落ち着いて欲しい。我々は君に何もしてはいない。我々も君と同様、何者かにここまで連れてこられたんだ」加藤が静かに言った。

男は疑い深げな目で加藤を睨み、それから全員を睨んだ。義男は男と目があうと慌てて逸らした。この男はすこしおかしい。

「本当か？」男は血走った目を加藤に向けた。見ているだけでぞつとする、思わずしかめ面を浮かべたくなるような目で、事実満雄と勉は彼を不快感露わな顔で見ている。

しかし加藤はにつこりと笑った。「本当だとも。嘘をつくことはない。そうでなければなぜこんなところにいると思う？ 今だって扉の鍵が開かなくて右往左往していたところだというのに。君のおかげで鍵は開いたようだが」

「ああ、内側から掛かっていたみたいだな」男が言った。そういつた瞬間だけ、男は普通の顔になった。異常者ではない、どこかとぼけているが、穏やかな表情。

「助かったよ。ありがとう」加藤が言った。

義男は思った。これはあの老人のマジックだ。さつきまで尋常ではない殺気を放っていた男が急に大人しくなってしまった。あの老人のスマイルは人を落ち着かせるものがあるようだ。本人もそのことを自覚しているに違いない。

男は氣勢を殺がれたようで、次にどういう行動を取っているのかわからずに戸惑っている様子だった。男が何かを言いかけたそのとき、反対の扉の鍵が外される音がして、扉が静かに開いた。

現れたのは痩せた長身の老婆だ。痩せた、といってもがりがりに痩せこけている、というわけではないが、それでも痩せていることは痩せている。歳は六十を越えている、と義男は予測した。それは誰もが予測できることだった。しかし、義男は奇妙だと思った。彼女の目を見て、美しい、と感じたことに。自分はそんな趣味があったのだろうかと老婆をまじまじと見てみる。老婆は確かに年齢を重ね皮膚は皺だらけだが、その目だけは異様に綺麗だと認めざるを得なかった。

彼女の目を見て七人全員が何かの宝石をイメージした。エメラルド、サファイア、ルビー。どれも色が違うが、美しさは同じだった。実際の彼女の目は薄い茶色だったが、微かに青い部分があるように思えた。瞳の中心に義男はそれを見て取った。灼熱の太陽に照らされ、煌くように輝く海を彼は頭に思い描くことができた。

「あらあら、一体何なの、これは」年老いた女は美しい声だった。だがその声のせいで老婆が怒っている、戸惑っているということが七人には伝わらなかった。「これはどういうこと？ 一体何故こんなことをするの？ あたしが何をしたら」

「おばあさん、落ち着きなよ」満雄が笑みを浮かべて老婆をなだめた。「俺たちもそつちと同じで、ここに連れてこられたんだ」

「俺達だってなんで誘拐されたのか、さっぱりわからない」勉が付け足す。

「だから、あなたも私達のように椅子に座り、自分の身に起きたこ

とでも話してくれんかね。そちらの君も」

小柄な男と年老いた女は不安げな顔を浮かべていたが、とにかく椅子に腰掛けた。

「ここにいる全員が誘拐されたというの？」女が聞く。

「そうです。ここにいる全員が、何者かに誘拐された。そしてその実行者たちはまだ姿すら見せていない。上にあるモニターを見て御覧なさい」

女は加藤に言われたままにモニターを見た。小柄の男もそれに倣った。二人とも食い入るように画面を見つめ、それから数秒後、「なんなのこれ？」と女が言い、「なんだこれは？」

と男が言った。

「私達にもさっぱりだ。さて」加藤が立ち上がった。一同の視線が加藤に集まる。「扉も開いたことだし、私は食事を取ることにしようと思う」

「部屋に戻るってことかい？ 最初の場所に」勉が聞く。

「そうだ」

「そんな呑気なことでもいいのかよ。俺達誘拐されて、ここがどこかもわからないんだぞ、つたくとぼけた爺さんだ」満雄が言う。

「不安ではあるが、とにかく腹が減って仕方がないんだ。また扉が閉まったりしては嫌だろう？ 各人、まずは自分達の部屋に戻ってみてはどうか」

加藤は扉を開け、広場を去った。

「あの爺さんの言うことも一理あるかもね」水野瑠美子が言った。

「ここにいるも始まらないみたいだし、あたしもいったん最初に戻った部屋に戻ってみる」

瑠美子が去ると勉と満雄が二人で相談しあい、「俺達もそうするか」といつて去っていった。

「俺達も戻ろう」義男が沙智子に言った。なんとなく、残されたメンバーが嫌だったので義男は早くここを去りたかった。老いた女のほうはまともそうだったが、小柄な男はなんとなく怖かった。見た

目はただのチビだが、妙な迫力があつた。狂気を感じる。

「はい」沙智子は逆らわなかつた。二人は広場を去る。扉を閉める前に老いた女が「なんだかさっぱり」とつぶやくのを義男は耳にした。扉を閉め、義男は通路を進んだ。

迷路へ

沙智子と別れて、義男は目覚めたときにいた部屋に戻った。部屋は先ほどと全く変わっていない。あれから四時間ほど経っただろうか、義男は時計を見た。時刻は午後一時を回っていた。義男はベツトに座り、大きなため息をついた。これからどうなるのだろうか、果たしてここから出て外の世界に戻ることができるのだろうか、そんな心配ばかりが頭をよぎる。かなり腹が空いていたが、はてさて、食事はどうすればいいのだろう。部屋に食事を用意するとモニター画面に書いてあったのだが。

それから義男の考えを読んだように、壁の一部が突き出された。義男は驚いて近づいてみた。引き出し状のものが壁から飛び出て、その中には弁当が用意されていた。水色のプラスチックの容器が二つ。そしてその前に割り箸が置いてある。義男は早速それらを取り、机に置いて容器の蓋を開けた。梅干が真ん中に載った白米、ハンバーグにゆで卵、それからサラダが盛り付けられたおかず。義男はそれらを食し、全て食べ終わると腹は満杯になった。満足だった。義男は容器と割り箸を引き出しに入れた。引き出しがゆっくりと閉じていく。重りに反応したのか、この部屋が監視されているのか、義男はそんなことを考えた。

さて、これからどうするか？ 義男は思った。もう十分食べたし、十分寝た。となれば、娯楽の時間だ。しかし、部屋の中にはパソコンとそれに机、ベットしかないのだ。テレビくらいあってもよさそうなものだが。広場にいけばテレビは見れるが、果たしてあの老婆と小柄な男はどうしているだろうか。

義男はふと、机の引き出しを開けてみるということをしていないということに気づいた。引き出しは四段あり、一番上には鍵穴がついている。義男は一番上の引き出しを開けてみようとした。開かない。どうしても開かない。まあ、いいや。義男はそれを放っておく

ことにした。その下の引き出しを開けると、そこには携帯ゲームがあった。今流行りのゲーム機だ。

「ゲームなんて全然してないな」彼はそうつぶやいてゲーム機を手にとってみた。ソフトは何だろうと取り出してみると義男好みのものだった。義男はにやりとした。なるほど、退屈しのぎにはなるわけだ。義男は携帯ゲーム機をしまった。それから三段目の引き出しを開けてみた。

三段目の引き出しには小説が入っていた。義男は舌打ちした。二時間で読めるようなホラー小説かなんかがあればいいのだが、中にはアガサ・クリステイのミステリーが山のように入っているだけだ。下のほうにはコナン・ドイルの本やアラン・ポーもある。どれも古臭い本ばかりだ。義男の興味対象ではなかった。義男は引き出しをしめた。四段目の一番大きな引き出しを開けた。

そこには漫画本が引き出しいっぱいに入っていた。なるほど、これだけあれば暇つぶしにはなるに違いない。いずれも真新しい本ばかりで、現在、週刊誌で連載されているものばかりだった。義男はその中から一冊を選び、（それは好きなシリーズの最新刊だった）ベッドの上で読み始めた。一冊読むのに三十分ほどかかった。義男はそれを戻し、別の漫画を探した。好きな週刊誌に載っている漫画本が多く揃っているのは嬉しかった。二冊目を手に取り、ベッドに横になるとノックがした。

義男はベッドから離れ、扉を開けた。扉の向こうで、沙智子が立っていた。

「どうしたの？」義男は思わぬ来客に喜んだ。

「部屋にいても落ち着かなくて」沙智子は床に目を向けて言った。

「とりあえず入ってよ」義男は沙智子を部屋に招いた。

義男は机の椅子に沙智子を座らせ、自分はベッドの上に座った。

「部屋の引き出しは開けてみた？」

「ええ、だけどこんなときにはどうでもいいものばかりで」

義男はうなずいた。そしてこんなときでも漫画本を読んで楽しんで

でいた自分は少しおかしいのかなと考えた。

「一人でいると落ち着かないんです。というよりも、大体、こんな部屋にいて何になるっていうんですか。早くここから出る方法を探さなくちゃいけないんじゃないですか」沙智子はどことなく責めるように言った。

「そうだけどさ」確かにそうだ、義男はうつかりこんなところでのんびりしていた自分を恥じた。

「廊下の奥に言って見ませんか？ たぶん、他の人たちも同じ事を考えていると思うんだけど」

「でもあの扉は閉まっているじゃないか」

「部屋に戻ると引き出しの上にこんなのが置いてあったんです」

沙智子は銀色のものを義男に手渡した。それは鍵だった。

「扉は開きましたよ」沙智子は軽く微笑を浮かべた。「一人じゃ怖いで、一緒にいってくれませんか？」

「いいよ、いこう」義男は即答した。だが果たして扉の向こうにいったとして、それが出口へとつながることになるのかどうか、義男には疑問だった。準備するものなど何もないので、義男はそのまま外に出た。

迷路の中

廊下を少し進むと扉が見えてきた。開けようと試みるも扉は閉まっている。

「ところで食事は食べた？」

「一応。あんまり食欲がなかったら残しちゃったけど」

「そっか」女の子はデリケートだなと義男は改めて思った。それとも普通に弁当を食べた自分は少しおかしいのだろうか。

扉の前に来た。開かなかった扉は簡単に開き、義男と沙智子はその向こうに出た。

義男は割合広い場所だなと思った。天井も壁も丸みを帯びていて卵型の形をした場所で、あらゆる方向に、正確に言うところ八方にアーチ型の通路があり、それぞれかなりの奥行きを見せていた。壁は銀色だった。

義男は戸惑った。こんなにも進む先があると、どこへいっているのやらさっぱりわからないし、無闇に進んで迷ってしまうのは怖かった。

「すごいね」義男は沙智子に向かっていった。

「すごいでしょ」沙智子の義男の反応を面白がっているようだった。

義男は首を動かして見返し、それから沙智子に手で、ここで待てという指示を出し、とにかくアーチ型の通路の一つを進んでみることにした。八方の中から一つを選んだ。一番右から二番目の通路。

右斜めの方向へ進んでいく。通路は狭いが、別に歩くのに支障はない。義男は時々後ろを振り返りながら進み、沙智子がこちらの背中を見守っているのを確認した。彼女の顔の表情がわからないほどの位置までくると、直進と左右に通路が分かれた場所に出た。そしてどの道も途中で右に湾曲していて先が見えなかった。義男は左に進んでみた。右に曲がりだし、それからすぐに四方に分岐した場所に出た。左、斜め左、直進、斜め右の四方向だ。何がなんだかわから

ない。義男はもうこれ以上進んでみる気にはなれなかった。義男は来た道を引き返した。大した進んだわけではないので、沙智子がすぐに見えたが、義男の頭の中は完全に混乱状態だった。

「どうでした？」戻ると、沙智子が尋ねてきた。

「うん。わけがわからないよ。ちよつと俺には無理みたい」

「やっぱり迷路みたいになっているんですか？」

「ごちゃごちゃの迷路だったよ。さ、戻ろう。これじゃ進めないよ」
義男は沙智子の返事も待たずに扉を開けて部屋に向かった。沙智子はしばらく考えごとをしているようにその場に立ち尽くしていたが、義男が呼びかけるとしぶしぶといった様子でついてきた。

「モニターではここが地下迷宮だといっていた。たぶん、あの扉から先が迷宮の始まりなんだ」

「地下迷宮」沙智子がつぶやいた。

「出るのはちよつと骨が折れそうだ」義男は言った。しかし、これだけでは沙智子を不安にさせるだけだと思いなおした。そして何か「フォー」をいれようとしたが、沙智子が義男の顔を見た。

「焦らずに探るように進めばそのうち外に出られるかもしれませんね」

「ああ、そうだね」義男はそう答えた。沙智子の顔には希望の色があった。何か思いついたのだろうか？

義男は自分の部屋の扉の前で立ち止まった。

「どうしよっか？」

「私は広場に行ってみます。他の人たちも困ったらあそこに集まるだろうと思うし」

「なるほど。俺もいくよ」

二人は廊下を進んだ。加藤老人の部屋の扉を通り過ぎるとき、足音を聞きつけたのか、扉が開いて加藤が出てきた。

「やあ、君たち。お散歩かい？」

二人は特に反応を示さなかった。

「冗談だ。広場にいくのかい？ 私もいこう」

「ここから出る方法でも考えついたんですか？」沙智子が聞く。
「いやあ、全くわからんよ。しかしみんなに見せたいものがあった
ね」

警告

三人は広場に向かった。扉を開けると、四人の姿があった。横井勉と富士野満雄、水野瑠美子。それに先ほど老婆と小柄な男。全員揃っているようだ。老婆は瑠美子と話し合い、楽しそうにしていた。しかし小柄な男のほうは難しそうな顔をして周りを睨みつけるようにして椅子に座っていた。

「もう迷路を試したのか？」満雄が義男を見て聞いてきた。

「迷路？」加藤もこちらを見る。

「鍵があつたんです」沙智子が答える。「それで、奥の扉を開けたんですけど、奥は道がいっぱいあつてすごい複雑になってるんです」

「こつちも同じだ」勉が言う。「あんなんじゃとても進めねえよ」

加藤がポケットから折りたたまれた紙を取り出した。「君たち、これを見てくれ」

「何それ？」瑠美子が言う。六人は加藤の周りに集まった。しかし、小柄な男だけが椅子に座ったままでいる。

「君も見せてくれないか？」加藤が気づき、言った。

「俺も見たほうがいいのか？」男が胡散臭そうに聞き返した。

「この中にいる全員に関係があるだろう」

男は椅子から立ち上がっておずおずと近づいてきた。ぎこちない動作に満雄がクスリと笑うが、瑠美子に手で突かれて仕方なくやめた。

加藤はたたまれた紙を開いた。白い紙が開かれ、加藤はそれを見んなに見せた。一同はしばらく紙面に書かれた文字を読み続けた。

警告

夜の九時以降はなるべく、廊下をうろつかないこと。また、扉の鍵をかけておくこと。憩いの場にもいかないこと。夜の九時から

朝の六時まで、開かない扉が開かれる。嚴重注意！ 怪物は夜から朝方にかけてその本性を曝け出す。寂しさから、孤独を避けようとするのが一番危険だということを承知しておくように。

管理人より

「何だよ、これ」勉がつぶやく。

「これはどういう意味なのか、誰かわかる人はいるの？」老いた女が言った。

「私にもわからんが、上のモニターにも出てるだろ、怪物に注意と。怪物というのが一体なんなのかはさっぱりだけど」加藤が言う。

「わからないことだらけなのに、ますますわからなくなっちまった」満雄が言った。

「憩いの場っていうのはこのことだろうな」小柄な男が言った。

「とにかく、九時以降は部屋から離れるなっことだろ。わけがわからないけど、警告は素直に聞いたほうがいいかもしれない」

「うん、私も同意見だ」加藤は手紙をしまった。

義男は時計を見た。まだ二時だ。夜の九時といえばあと七時間もある。

「ところでお二人さんの名前はなんというのだね？」加藤が、老婆と小柄な男に聞いた。

「私は西岡です」老婆が答えた。

「沢登だ」男が小さく答えた。

「なるほど、私は加藤だ」加藤はうなずいた。「とにかく、これはみんなに見せるべきだと思って持ってきたんだ。それじゃ、私はまた失礼するよ。迷宮にも入ってみたいし。いや、私達はすでにその迷宮内に入って、閉じ込められているんだっただ」加藤は出て行った。

「おい、そっちは大丈夫なのか？」勉が義男に言った。

「何がですか？」

「犬だよ」満雄が苦い顔をする。「迷路を進んでたらさ、やたらとおおきな犬がいたんだ。そいつがいきなり襲い掛かってきたもんだからさ、俺達は全速力で逃げたんだ。扉を閉めちまえばよかったんだけど、そんなこと考えてる余裕がなくてさ」

「それでここまで逃げてきたの。あんなのがいたら戻る気にもなれないしね」瑠美子が言う。

「向こうからも迷路につながってるんだろ？俺達もそっちへいくよ」満雄が言う。

「それよりも何か武器があればいい。犬を追っ払えるようなさ」勉が言う。

「とにかくそっちのほうにいつてみようよ」瑠美子が言い、三人は義勇たちがきた扉を入っていった。

「どうしよう？」義勇が沙智子に聞いた。

「みんなでいったほうがいいかもしれないですね」

二人は三人の後を追うことにした。

「あたしもいつていいかしら？」西岡と名乗った老婆が尋ねてきた。「いいですよ」義勇が答える。

三人は憩いの場を去り、奥の、迷路へと続く扉に向かった。扉はすでに開いていて、迷路の入り口に瑠美子と勉が立っていた。義勇は足音を立てて彼らを振り向かせた。

「あんたらか」勉が言う。「今満雄が迷路を試してるんだ。そろそろ不安になって戻ってくると思うけど」

「これが迷路なの？」西岡が素っ頓狂な声を上げた。「何だかすごいところね」

「こっちも似たようなものだな、俺達のほうと」

「地図があればこんな苦労しなくてもいいのに」瑠美子が言う。「確かにそうだ」勉が同意した。

満雄が戻ってきた。ふつくらとしたその顔は笑っていた。

「何だ、何か収穫でもあったか？」勉が期待して聞く。

「俺、ドアを見つけたんだ」

「ドアを？」 勉が聞く。

「ああ。だけど鍵がかかっているのか開かなかった」

「じゃ、そのドアの鍵を発見するしかないってわけだな」

「あまりに複雑すぎてさ。わけがわからなくなった。とにかく、進むには鍵が必要だ」

「こつちには犬はいないのか？」

満雄が苦い顔をした。「犬の毛らしいものが落ちてたよ。何か武器みたいなのがあればいいんだけど」

「そうだな、武器と、それに鍵か。見つけたらまた来よう」

「戻るわけ？ 犬はどうするの？」 瑠美子が聞く。「まだ私達の部屋の前でうるついているかもしれないじゃん」

「ビール瓶でも投げつけてみるか」 勉が提案した。

「いいかもしれないな」 満雄が同意した。「犬一匹にいつまで脅えたられつか」

三人は戻っていき、後に義男と沙智子それに西岡が残された。

「俺達も戻ろう」 義男が提案した。

「でも、戻ったってここから出られるわけじゃない」 沙智子が出た。

「あたしも戻ってみる。それじゃあね」

西岡が去っていった。彼女の香水の残り香が義男の鼻にまとわりついた。あまり好きな匂いというわけではないが、全く嫌いでもなかった。

「とにかく俺は戻るよ」

「私、ちよつと歩いてみます。奥に扉があるっていつても、道はそれ一つだけではないんだから」

義男はどうすればいいか考えた。一緒にいくべきだろうか、しかし、二人でいつて迷子になるのはまずい。

「一人じゃ危険だろ？」

「大丈夫」

「そっか。じゃあ、気をつけて」 義男は少し躊躇した。このまま沙

智子一人に任せてもいいものだろうか。しかしまたあの迷路の中を進む気にはならなかった。沙智子の後姿を見守り、義男は部屋に戻った。

迷路での発見

義男は部屋に戻るとすぐさま漫画本の続きに取り掛かった。漫画を読んでいるうちに迷路のことも、それに取り組んでいる沙智子のことも忘れた。五冊ほど読んでいくうちに時間は進み、義男が漫画を読むのに疲れ飽きたころにはもう六時になっていた。時計を見て義男はあと二時間経たないと食事を摂れないということ考えた。腹はそれほど空いていなかったが、漫画を読むのも退屈になってきた。漫画を机の中にしまい、義男は部屋を出た。通路は静かだった。広場のほうに行ってみようかと考えたが、沙智子のが気になったので迷路の入り口へと向かった。扉を開けて入り口に出る。八つの通路を見ると、うんざりした。

沙智子の姿は見えなかった。迷路の中で悪戦苦闘しているのか、それとももう自分の部屋に戻っているだろうか。義男はとりあえずその場で立ち止まって、自分も、もう一度迷路に挑戦してみようかと考えた。ここから抜け出すには迷路の中を進むしかないのなら、ここを進むほかはないのだろう。しかし満雄は鍵が必要だといっていたな。

この中のどれが出口へ通じているのだろう。義男は考えてみた。どれか一つが出口に通じるとして、どれかを適当に進んだとしても出口に当たる確率は十二、三パーセントくらいしかない。どれかを選んでも道順さえ正しければ最後には出口に通じるかもしれない。全ての通路がつながっている場合もある。

義人は右から三番目の通路を進んでみた。前の道はすぐに分岐点に出たが、この道は進めど進めど一本道で、十分歩いてようやく右か左に進める分岐点に出た。義男はこういとき人は無意識に左を選ぶ傾向にあるという左の法則を思い出した。義男はそれに反して右に進んだ。右の道は長く、そして単調だった。何度か引き返して部屋まで戻ろうかと考えたが、途中までくると引き返すのも面倒だと

感じた。とにかくひたすら進んでみた。ようやく通路が三叉に分かれた場所に出た。しかし、真ん中は少し歩くと行き止まりになっているし、左右の右の道は行き止まりになっていた。左に進むしかないだろうと義男は思い、左へ向かった。またもや単調な道だったが今度はすぐに左右の別れ道に出た。左右の道の右側には扉があった。左の道は右に湾曲して、その先はわからなかった。

義男は扉を発見して少し興奮していた。満雄が言っていた扉かどうかはわからなかったが、義男は扉の前に立ち、ノブを回してみた。おそらく開かないだろうと思っていた扉は簡単に開いた。軽く驚きながらも義男は扉をくぐった。扉の先は部屋になっていた。小さな部屋で四方を白い壁が囲んでいる。机が隅にぽつんと置かれていた。義男は机の前に立ち、色々と調べてみた。見たところ、何も無いようだった。義男は引き出しを開けてみた。一段目の引き出しを開くとさつそく何かが見えた。白い紙切れが一枚、置いてあった。義男はそれを手に取った。紙切れには何か書かれてあった。義男は書かれた内容を読んだ。

恐怖の根源は自身の中にある。それを認めない限り、ミノタウルスはやってくる。

ミノタウルスという単語には義男は馴染みがあった。ゲームなどでよく出てくる、半人半牛の化け物。有名なモンスターだ。ミノタウルスがやってくる。義男は背筋に戦慄が走るのを感じた。迷路の中を歩いているときに、牛の顔をした化け物が襲ってくる……それはとても非現実だが、実際にそんなことが起きたら卒倒ものだ。

この短い文章が何を意味しているのか全くわからない。とにかくこれはみんなに見せよう。義男は紙を折りたたみ、ポケットにしまった。そして二段目、三段目と引き出しを開けるか、もう何も出

てこない。ここにはもう他に何も無いようだとわかり、義男は部屋から出ようとした。そして彼は小さな悲鳴を上げた。扉だった。扉には扉全体を占めるように牛の顔が描かれていた。牛の頭はデフォルメされていて、まるで悪魔のように見えた。睨み付ける目、その目から赤い血が流れ落ちていく。鼻輪をつけた鼻、そして異様に大きな歯が生えている口からは人間の手が見えている。その手はまるで、助けてくれといわんばかりに突き出ているように見えた。

「くだらない」冷静になると、義男はつぶやいた。慣れてしまえばその絵は荒々しい音楽バンドのCDジャケットの絵でしかない。義男は部屋を出て、扉を閉めた。それから義男はその場に立ち尽くし、次にどうするか考えた。左の湾曲した道を進もうかとも考えたが、そろそろ引き返すのが難しくなりそうだった。進んでみたい気持ちを押し殺して、義男はきた道を引き返し始めた。少し混乱したが、歩いてきた順路をなんとか思い出しながら歩くと、始めの場所まで戻ることができた。単調な通路が長かったためか、少し時間がかかった。義男は扉を開けて、自分の部屋に戻った。時刻を調べたかったのだ。時計を見ると、もう七時を回っていた。食事の時間までまだ一時間あるし、沙智子のことも気になったので義男は沙智子の部屋の前にいき、ノックをした。すぐに扉が開いて沙智子が現れた。

「義男さん」

「迷路、どうだった？」

沙智子の顔が輝いた。「色々みつけましたよ」

「見つけたって？」

沙智子は机の引き出しの一番上を開け、その中から一冊のノートを取り出した。そしてその最初のページを開いて義男に見せた。義男が見たのは手書きの地図だった。迷宮の地図だとはすぐにわかった。なるほど、沙智子は地図を作成するつもりだったのか。義男は感心し、なぜ自分は地図の作成ということを考えなかったのかと反省した。地図を入念に見てみる。最初の出発点から八つに分かれた道まで、細かく丁寧に描かれている。だがまだまだ白紙の部分が

多い。

「大したもんだ」

「だけどあの迷宮、思った以上に複雑です。本当にあそこから出口に辿り着くとしても、結構時間がかかるんじゃないかと思えます」

「ま、根気よくやっていけばいいんじゃないかな。そうだ、俺もさつき迷宮に入ったんだ。そしてさ、扉を見つけてさ、その奥の小部屋でこれを見つけたんだ」義男は紙切れを沙智子に渡した。沙智子はすぐにそれを読み終え、首をかしげながら義男に返した。

「どういう意味です？」

「さあ、俺にもさっぱりわからない。意味なんてあるのかもわからない」

「それ、加藤さんに見せてみたらどうか。あの人なら何かわかるかも」

「そうかな、こんなもので何かを発見できる人はいないと思うけど」義男はそう言いつつも加藤にそれを見せてみようと思った。

「今からまた迷宮にいつてみます」

「今から？ 一人で大丈夫かい？」

「怖くなつたらすぐ戻ります」

義男は笑った。「それが一番だよ。そういえば、向こうの方から迷宮に入ることができるといつてつたっけ。あっちとそっちとはつながってるのかな？」

「わからないけど、その可能性はあります。ここ、見てください」沙智子はノートを指差した。「見ての通り、ここはもう入り口よりずっと南側にありますよね。扉に鍵がかかってたから、その先に進むことはできなかつたんですけど、向こう側とつながっている可能性もあります」

「なるほどね」

「あ、そうだ」沙智子は二段目の引き出しを開けた。そしてそこから何かを取って義男に見せた。それは鍵と、ナイフだった。鍵は銅の鍵で倉庫などを施錠するとき用いるような大きな鍵だった。ナ

イフは、普通の果物ナイフではない。明らかに戦闘を意識して作られたような形状。サバイバルナイフの種類の中でも戦闘用に作られたもの、ファイティングナイフだ。どちらもほつそりとした小さな手をした沙智子が持っていて、も全く似合わない代物だった。

「それ、迷宮で見つけたの？」

「そう。この鍵は小部屋で見つけたんです。どこで使うのかはさっぱりですけど。こっちのナイフは別の小部屋で見つけたものです。ほら、ここここですね」沙智子は地図で小部屋の位置を義男に見せた。×印がついているのはもうここは確認済み、という意味だろうか。

「まだまだあの迷宮には色々なものが隠れているはずですよ」沙智子はいいい、鍵とナイフと地図を持って部屋を出た。義男も続いた。

「そのナイフも持ってくるの？」

「一応。護身用に」

「ま、狂犬が出るっていうから、用心に越したことはないよね」義男の頭の中で大きくて真っ黒な犬が出てきた。確かにそれは恐ろしい存在かもしれない。しかし……あの部屋を出て以来、義男の頭を離れないのは、牛頭の人間のイメージだった。裸の体に鬼のパンツのようなものを穿いている。そして、手には棍棒を持っている。鬼のイメージとかぶる、と義男は思った。鬼にも牛鬼という体が人で頭が牛という奇妙な鬼がいる。馬鬼という仲間もいた。馬面の頭をした鬼。

「どうかしましたか？」

沙智子の声で義男は我にかえった。沙智子が不思議そうな顔で義男を見つめていた。

「いや、ごめん。それじゃ、気をつけて。俺はちよつとジューズでも飲んでリラックスしてくるよ」

「何かあったら教えてください」

「お願い」

沙智子は去っていった。背中越しから沙智子が迷宮内に赴くのを

心待ちにしているのが感じられる。地図の作成が楽しくて仕方がないのだろう。

女の子を一人で行かせていいものだろうか。義男はそう思いながらも、憩いの場へ向かった。

ミノタウルス

扉を開けると、予想通り、幾人か集まっていた。あの小柄な男と満雄以外は全員揃っているようだ。

「何かあったのか？」義男がくると加藤がすぐに椅子から立ち上がった。

「ええ」義男は紙切れを加藤に渡した。

「何か有用な情報でも書いてあるのかな」加藤が微笑んで紙切れを受け取った。加藤は紙切れを広げ、そこに書いてある文章を声に出して読み上げた。

「恐怖の根源は自身の中にある。それを認めない限り、ミノタウルスはやってくる」加藤は読み終わるとそれを義男に返した。

「迷宮の中で見つけたんです。何か意味があると思います？」

「ミノタウルスってクレタ島のあのミノタウルスよね？」西岡が言った。「テセウスとアリアドネのお話の」

「ラビリンス。ミノス王の迷宮」加藤が呟く。「つまりはここが、この奥にある迷路をミノス王の迷宮と見立てている、ということがもしれない」

「じゃあ、あの迷路の中には半人半牛の化け物がうろついているっというの？」西岡の顔がほころぶ。

「それはありえないだろう。だが何か、危ないものがうろついているという可能性はあるかも……しれないな」

「よしてよ、そんなの」瑠美子が顔を顰める。

「ただの牛が歩き回っているだけかもな、草を求めて」と勉。

「それならいいがな」加藤はそう言い、ポケットから義男が持ってきたのと似た紙切れを取り出した。「みんなにはもう見せたんだ」

義男は紙切れを受け取った。そして紙切れに書かれた文章を読んだ。

破滅から逃れる方法は二つある。

一つめはひたすら自身を抑える術を学ぶこと。

二つめは自身を解放させることだ。

「俺にはよくわからないです」義男は紙切れを返した。

「それがみんなの答えだ」加藤が言う。

「実は俺のもあるんだ。誰か見たい人いるか？」勤が立ち上がり、パンツの尻ポケットから紙切れを一枚取り出した。義男は勤が左手にスイス製の赤いアーミーナイフを持っているのに気がついた。

勤は義男がナイフを見ていることに気づいた。「ああ、これ。迷路の中で見つけたんだ。十徳ナイフってやつ」

「どうして黙ってたの？」瑠美子が問う。「何かを見つけたなんて一言もいわなかったじゃない」

「ああ、忘れてたんだ」勤はさらりと答えた。「あんまり大したことじゃないと思ったから……満雄が欲しがるかもしれないし」

「いらねえよ」といいつつも満雄の目はナイフに釘付けた。

「その紙を見せてくれないか」加藤が言い、勤は加藤に紙切れを渡した。加藤の周りにみんなが群がった。

虎か羊か。見極めを誤らないこと。

「どうでもいいと思ったけど一応持ってきたんだ。どうでもいいと思いきり忘れてたよ」

「その十徳ナイフ、持っててなんか意味あるの？」瑠美子が聞く。

「何かと便利だと思うよ」そういった勤の顔は自信なさけだった。

「ミノタウルスか。それに迷宮。一つの仮説が浮かんだ」加藤が言

い出した。

「たぶん、私と同じ考えだと思うけど」西岡が言う。老女の目は加藤とあい、しばし二人は見つめあった。老女の目は輝きに満ちていて、皺だらけとはいえシミはほとんどなかった。義男は老女の目に知性のきらめきを感じた。しかしそれは加藤のほうにも感じ取れた。ただ、西岡のほうがより自信を持っている、というように見て取れた。目の輝きにそれが表れている。

「聞かせてくれ」加藤が言った。

「私達は誰かに遊ばれている。これはたぶんみんな思ったことよね？」

「そうだな」加藤は不愉快そうな顔つきをした。「私達は遊ばれている。私達を拉致した者たち　それが何者かはわからないが、この迷宮内に連れ込み、そして迷路をさまよわせる。そしてそれを監視カメラが何かで観察し、高みの見物を決め込んでいるのだ。私達を酒の肴にしているのか、何かの実験に使っているのかはさっぱりわからん。とにかく我々は玩具か、あるいはマウスのような存在になってしまった。ただ迷路をさまよわせるだけでは緊張感がないので、ミノタウルスという架空の存在があたかもいるかのように思わせて、私達の慌てぶりを楽しむつもりだ」

「でもそれは最初に私も考えたの」瑠美子が言った。「何かのゲームか、実験材料なんだろうってのはね。なんか映画とかでこんなシチュエーションありそうじゃない？」

「あたしの考えた仮設はね」西岡が瑠美子を見つめて言う。「加藤さんが言ったのとほとんど同じだけど、一つだけ違うところがある。ミノタウルス。ミノタウルスは恐怖を付加させるための演出として存在するかもしれないし、そう匂わせているだけかもしれないとも思ったの。でもね、ええと、あなたなんて名前なの？」

西岡は義男のほうを見た。

「田辺です」

「田辺君が持ってきたのと、横井君が持ってきたのも似たようなこ

とが書いてある。これは明らかに忠告だと思うの。ミノタウルスはやってくる。これは私たちを監視している者がミノタウルスだということを書いてあるのと思うの」

「ミノタウルスとは監視者のことで、ミノタウルスがやってくるというのは監視者が我々に厳罰を与えるためにこちらに姿を見せる、ということをお願いしたいわけかな？　あるいは監視者が雇った残忍な連中だということにしてもいいが」加藤が言った。加藤の指摘に西岡は笑みを浮かべて見せた。

「そうよ。監視者がミノタウルスで、厳罰を与えにやってくる。そうじゃない？」

義男はなんだか拍子抜けしてしまった。これは所詮、机上の空論でしかない。二人の老人が言い争っても答えが出るはずがない。何か、確実にそうなのであろう、と思わせる意見があればいいのだが。

「紙切れの文章で肝心なのはミノタウルスの正体ではないはずだ。たとえばこれが忠告だとしても、我々の中でこの忠告を受けて、それを理解できる者がいるかな？」

「今の段階では誰にもそれを証明することはできないはずでしょ」「溜美子が言った。「もっと迷宮を探れば、情報がどんどん増えていくと思うけど」

「確かにそうだ。今の時点で色々意見を言っても仕方ないかもしれない」加藤は大きく息を吐いた。「それじゃ、私はそろそろお暇するでしょう」加藤は立ち上がった。義男も加藤と一緒にこの場を去ることにした。

「もう遅いし、自分の部屋に戻ったほうがいいかもね。ほら、九時以降は気をつけろっていうことだったしね」西岡が言った。

義男は時計を見た。もう八時を回っている。

「俺も帰ります。また紙切れが手に入ったら持って来ます」義男は言った。

「これだけの人数が探すんだ。いくら長い迷路でもすぐに出口なん

て見つかるよな？」勤が言う。

「だといいけどね」瑠美子が返す。全員、その場から離れ、自室に戻る雰囲気になった。加藤が扉を開けた。

「それではまた、明日。全員が明日まで無事であることを願っているよ」

「脅かさないでよ」瑠美子が言った。

加藤は笑った。義男は加藤について通路を歩いた。加藤は自分の部屋の前で止まった。

「九時以降は外に出ないようにしたほうがいい。一応な」

「わかってます」

「ではおやすみ」

加藤は扉の中に入っていった。沙智子はどうしているだろうか。義男は気になったが、自分の部屋に戻り、扉をロックし、用意されてあった食事。生暖かいナポリタンとサラダ、それに茸の入ったスープを平らげた。それから漫画本を読もうとしたが、うとうとと眠くなってきた。なので布団に横になり、それからすぐに眠りについた。意識が薄れ、無防備になることの不安はなかった。

一人の探索

義男が目覚めると、電気が消えていて暗かった。義男は暗闇が怖かったのですぐに電気をつけようと起き上がった。視界が黒一色で本当の意味で真っ暗だった。電気をつけると明るくなり、時計の時間が見えた。六時半だ。睡眠時間は十分だったようで、寝起きで頭が鈍っているとはいえ、調子はよかった。義男はベッドを見た。一瞬、これが自分の部屋のベッドだと思った。自分の部屋なら、ベッドの少し上の高さに窓があり、大抵はカーテンが中途半端に閉じていて、この時刻ならうつすらと朝の光が漏れているはずだ。その光が机に反射する。どこか寂しい光景。だがこの殺風景すぎる所よりましかもしれない。ここには窓もないし、朝日も、微風も入ってこないのだ。しかしここにいれば仕事にいく必要はない。仕事の苦痛を感じることはないし、他の色々な問題にも関わらずにすむ。

義男は首を振った。こんなことを考えるのはまともではない。他のみんなだって、一刻も早くここから出たいと思っているはずだ。他の連中は何をしているだろう。まだ寝ているだろうか。沙智子のことが頭に浮かんだ。なんとなく、彼女はこの時間にもう迷宮を探索しているような気がした。義男は部屋を出ようと思ったが、その前にトイレに入って小用を足した。終わるとトイレを出て、扉を開けて廊下に出た。廊下はしんと静まり返っているが、電気はついていて、扉を背にして左に進み、迷宮へ続く扉を開いた。八つのアーチ型の通路を見ると頭が痛くなりそうだった。昨日どの通路を進んだのか義男は思い出し、今日はどこの通路を進んでみるか、どの通路を進むことに決めるかと義男は考えた。

しかし、考えてみればいきなりこの迷路を試すことはないのではないだろうかと思ひ直した。沙智子も地図を作成しながら進んでいる。こちらがやることはそれを黙って待つことだけだと義男は考えた。時間はたっぷりあるし、暇つぶしに探索するのも悪くないな

と思い直した。

義男は一番左から二番目の道を進むことにした。沙智子はここを通つただろうかと考えながら歩いていくと、大きく左に折れ曲がる道に出た。左に曲がると今度は道幅が広くなり、進んでいくことに段々と狭くなつていった。壁は銀ではなく、白い壁に変わり、それから黒と白の市松模様が変わつた。床も天井も黒と白に変わり、義男は思わず目をしばたいた。だがこちらのほうが銀の壁よりも殺風景じゃないからだろうか、義男はなんとなく心が落ち着いた。一本道は長く、義男がだれてくると終わりになり、行き止まりに黒い扉があつた。ノブを回し、扉の中に入る。昨日の経験から小部屋に通じているだろうと思われたが、そこはまたもや通路で、目の前に四つの横に並んだ道があり、どの道を見ても似たような一本道が続いている。面倒になつてきた。今度こそ道に迷うかもしれない。だがこのまま収穫もなく引き下がるのもいやだつた。義男は一番右から二番目を選んで進んだ。一本道をだらだらと進み、それから右に折れ、少し進み、左に折れる。まっすぐ進む。通路は広くなつたが、少し照明が薄暗くなつた。やがて市松模様でもなくなり、銀色の壁に戻つた。義男は不安を覚えた。かなりきてしまつたが、まだ迷うほど道を選択したわけではない。構わずに進む。途中で右側の壁に大きな赤い扉があるのを発見したが、扉の取つてがどこにもなく、押してもびくともしなかつた。かなりの大きさで、鉈が無数に打つてあつた。まるで地獄の入り口へと続く扉みたいだと義男は思った。その扉を開けるのを諦め、先を進むことにした。内心、ほつとしていた。なんだか恐ろしい光景を見ることになるのではないかと思つたからだ。少し進むと左に折れ曲がり、折れ、まっすぐ進むと突き当たり扉があつた。ノブを回すと、見慣れた通路に出た。

義男は一回りして迷路から戻つてしまつたのだと思つた。ここは義男や沙智子の部屋がある通路とそっくりだつた。だが扉の配置が少し違う。ではここはどこだろう。扉はいくつかあるが、義男は奥へ進んでみた。突き当たりに扉があつたので開けてみると義男はこ

こがどこなのか理解した。

目の前には迷路の入り口と全く同じ光景があった。八つの通り道。義男はすぐにそこを出て、通路に戻ると反対側に進んだ。そして突き当たりの扉を開けた。

「やっぱり」

そこは憩いの場だった。

「何でそこから出てくるんだよ？」椅子に座っていた勤が立ち上がって驚いた顔をしている。見ると全員揃っていた。時刻は七時四十五分だった。一時間以上も迷宮にいたようだ。

義男は先ほどの迷路の経験を七人に話した。

「つながっているのか」加藤が言った。

「犬に襲われなかったのか？ 昨日は散々だったんだ」満雄が苦い顔をする。

「なににせよ、無事でよかったわね。収穫もあったみたいだし」西岡が言った。

義男は椅子に腰掛けた。沙智子が隣にいた。顔を見ると朝の挨拶をしてくれた。朝の沙智子は少し髪が乱れていたが昨日とさほど変わらなかった。目に隈がないところを見るとよく眠れたようだ。

「鍵がかかっているのか、開かない扉が結構あるみたいですね」義男は言った。

「そう、そういうの結構あった。でも鍵は結構見つけたんだ」瑠美子が手のひらを見せ、銀色の鍵を三つ一同に見せた。「鍵穴が一致するのがなかなかないんだよね」

加藤が立ち上がり、瑠美子の手のひらの鍵をまじまじと見た。

「ここに数字が書かれているな」加藤が鍵を指差した。

「そうなの」瑠美子が応じた。「これは十一。こっちは十六、こっちは十九」

「それ、扉の番号と一致すれば開くってことかもしれません」沙智子が立ち上がり、義男に見せた地図の描かれたノートを瑠美子に見せた。「扉の右上によく見ると小さく数字が書いてあったんです」

義男も沙智子の地図を見てみた。なるほど、地図の中には扉を示していると思われるDの字の右上に小さく数字が書かれてあった。Dの字は色が分かれていて、おそらく扉の色によってペンの色を合わせたのだと思われる。

「地図つてどれ見せてよ……うわ、びっしりだね。あんた結構行動力あるね」瑠美子が感心したように言う。

「こここの扉が十一と書いてあるな」加藤が言った。「十一番の鍵がある。早速試してみては？」

「右上に書いてあるなんて気がつかなかったな」瑠美子はそう言うてから顔を渋めた。「でも犬に遭いたくないし」

「あの狂犬共、かなりしつこいぜ」勤が言った。「まあいいや。俺朝飯食べたらちよつと迷路に入ってみる。今度こそ仕留めてやる」「殺すの？」瑠美子が言った。

「やらなきゃ、やられるんだ」満雄が危ない目つきで言った。「さあ、飯にしよう。もう時間だろ？」

満雄と勤、瑠美子は立ち上がり、この場を去った。義男も腹が減ってきたので立ち上がった。

「私達は少しここで雑談でもしているかな」加藤が言った。

「まあねえ、色々話すことはありますもの」西岡が微笑んで言う。のんびりしているな、義男は思った。まるで子供たちの行動を見守る夫婦みたいだ。

「ごゆっくり」義男はそう言って憩いの場を去った。振り向くと沙智子が後ろにいた。

「今日も迷路の中に入るの？」

「うん。早くここから出たいですから」

獣

二人はそれぞれ自分の部屋に戻った。食事を終わると義男は再び迷宮に戻ることにした。漫画を読んでいるだけでは必死で脱出口を探す沙智子に申し訳がないと思った。それに義男も早くここから出て行きたかった。廊下に出ると沙智子にばったり出くわした。沙智子は右手にノート、そして左手に鍵束を持っている。

「その鍵束、どうしたの？」

「机の中に入ってたんです。昨日はこんな入ってなかったんですけどね」

きつと監視者だと義男は思った。この迷宮に自分達を連れてきた連中は、こちらが出歩いていることを確認するとどこからか部屋に侵入するのだ。あるいは部屋のどこかに隠し扉が何かあるのだろうか？

「見張っている奴がいるってことだろうね」

「そうだと思います。怖いですね」

「怖いね。ねえ、今から迷宮にいくんだろ、俺も一緒にいいかな？」

「いいですよ。二人のほうが心強いですし」

「それじゃいこう。ところで犬に追いかけられたりした？」

「まだないです」

「何か武器があればいいんだけどな」

「これがあるけど」沙智子はスカートのポケットからナイフを取り出した。昨日見せてくれたファイティングナイフ。沙智子はそれを義男に手渡した。

「これでやつつけろって？ 結構怖いな沙智子ちゃんは」義男は笑

いながらナイフを眺めた。ナイフは魅了されるほどに美しく見えた。

「万が一にと思って」沙智子は目の前の扉を開けた。八つの通路が二人を待っていた。「今朝はどの通路を進んだんですか？」

「一番左から二番目」

沙智子はノートを開いた。しばらくノートを食い入るように見続ける。「ここは通ったことがあります。市松模様になる通路ですね。黒い扉のあと正面に四つに分かれた通路があったと思うんですけど、どこを通りました?」

義男は今朝のことを必死で思い出してみた。しかし、どうも記憶が不鮮明だ。「よく覚えてないなあ」

「私、一番右と一番左は通ったんです。一番右は行き止まりで、一番左は小部屋に通じていました。小部屋は何もない、空っぽの白い空間でした」

義男は沙智子の地図を眺めた。「じゃあ俺が進んだのは残り二つのどっちかだったけど、確か右側だったな。一番右から二番目だと思う」

「そこは一本道だったんですか?」

「うん。だけど途中で大きな扉があったよ。右側に。だけど入れなかった」

「鍵がかかっていた?」

「いや、鍵穴はなかった。というよりも取っ手がなかったんだ」

「ノブがない? それじゃ、どうしようもないですね」

「たぶん」

沙智子はノートを見つめ、それから一番右側の通りを見た。「ここにはまだ入ったことがないんです。いつてみます?」

「俺はどこでも構わないよ」

沙智子は一番右側の通路を進み、義男もその後を追った。道は左右に曲がっていて、進むのに苦労した。沙智子は立ち止まってはノートに通路を書き込んでいった。義男は軽く、散歩のような気持ちで沙智子の後をついていった。地図は沙智子がつってくれるし、帰りに迷うことはない。そう思うと気が楽だった。ただ、あまりにも沙智子任せにすぎても暇なので、何か自分が役に立つ場面があればいいなと想像してみた。化け物に襲われそうなところを助ける。闘いは男の役目。化け物といえばミノタウルスだ。加藤か西岡が言

っていた、何とか島のミノタウルス。

「ミノタウルスって、沙智子ちゃんの前から知ってた？」義男は沙智子の背中に話しかけた。沙智子が立ち止まった。

「半人半牛の化け物ってことしか知らないですよ」沙智子はそういうとまた歩き出した。

義男は沙智子の背中を見て、沙智子を怖がらせてしまったようだと思った。

「そんなのが本当にいるわけないよな」義男は言う。

「そりやそうですよ」沙智子は軽く笑ったようだが、おそらく引きつった顔をしているだろうと予想できた。

「だけど、あの紙切れの内容は気にならない？」

「ええ。だけど、私にはさっぱりわかりません」

「俺もだ。さっぱりわからない」

二人はそれから黙って歩き続けた。義男はミノタウルスについて、あの紙切れの内容について沙智子の意見を聞きたかったが、迷路内を歩いているときにこんな恐ろしい化け物の話題をするものではなかったと後悔した。

幾度か分かれ道があり、適当に選んで奥へと向かっていくと、二人は袋小路に辿り着き、途方にくれた。と、いつもの、長い一本道を進み、それから右折した途端にこれだったからだ。戻るしかないが、面倒な作業だった。

「この迷路は相当な広さに違いないね。一キロほど歩いたような気がするよ」

「五百メートルほどだと思えます。往復で一キロ。」沙智子は弱々しい笑みを浮かべた。

「とにかくさ、戻るしかないんじゃないかな」

義男が言つと、沙智子はうなずいたが、何故か動こうとはせず、壁を見ていた。

「どうかした？」不思議に思い、義男は尋ねた。

「ここの壁、色が少し違いますね」

義男は突き当たりの壁を眺め、確かに左右の真つ白の壁より少し黄がかかっている、というのに気づいた。しかし、それが何だというのだろうか。

「確かに少し黄色っぽいけど、別に大したことじゃないと思うな」

沙智子は義男の意見を無視して、壁を触り、それから強く押し、それから叩き始めた。だんだんと強く叩き、それが済むと今度は全力で押し出した。

「無駄だと思うけどな。隠し扉か何かだと思ってる？」

沙智子はとうとう諦めた。少し息が上がっている。無駄な頑張りをしている沙智子が義男にはなんだか可愛く思えた。

「さあ、戻ろう」義男は優しく言った。

「なんか引つかかったんだけどな、ごめんなさい」

「まあ、色々試すのは悪くないと思うよ」

二人は通路を引き返えそうとした。沙智子が時々後ろを振り返る。直線通路の終わり近くになると沙智子はまた振り返った。

「そんなに気になる？」

「なんだか、変な音が聞こえたような気がして」

「音？ 聞こえなかったけどな、別に」

「本当に、かすかに聞こえたただけなんだけど」

義男はかなり遠くに見える壁を見つめた。そのとき、激しい音が聞こえてきた。二人は驚いて竦みあがった。音は壁のほうから聞こえてきた。何が起こったのかはすぐにわかった。壁の扉が壊され、何か大きな獣が現れたのだ。二人は遠くにいなながらもその獣が何だかわかったような気がした。黄色い毛皮に、黒の縞がある。犬よりも遙かに巨体。

義男は目を疑った。それは虎だった。

沙智子が悲鳴を上げると義男はすぐに我にかえた。義男は沙智子の手を取って曲がり角を曲がり、それからもう滅茶苦茶に通路を走りまわった。どこを通れば入り口に戻れるかなんてわからない。目の前の道をひたすら走った。

加藤と犬

加藤は迷宮をひたすら歩いてきた。記憶力には自信がある加藤はかなり奥深く足を運んでしまったとはいえ、入り口まで戻ることにはいけないことだった。手には果物ナイフと、それに安物のエアガン。あまり使い道のなさそうなエアガンは捨ててしまおうかとも思ったが、せっかく小部屋で手に入れた代物だと持ち歩くことにした。これだけ武器類が多いのは満雄たち若者が遭遇した大型の犬の対策のためだろうか。たかが犬じゃないか。何も殺すことはないのではとも思うが。

しかし、戦闘用に訓練された犬ならば手ごわいかもれない。訓練されたドーベルマンなどがいたらかなりの脅威となりえる。もしそんなのと出くわしたら、果物ナイフで立ち向かうことができるかどうか。加藤は先へ進むのをためらった。それから、試しにエアガンの威力を試してみることにした。考えようによってはいい威嚇射撃として使えるではないか。加藤はエアガンを構え、壁に向かって発射した。発射音は意外に大きく、そして壁に弾が当たる激しい音。加藤はもう一発撃った。さらにもう一発。加藤はエアガンの煙の吹き出ている銃口を眺め、これは予想以上の武器になるのではないかと思った。加藤はもう怖いものなしだと思って、先を進んだ。

いきなり曲がり角から犬が一匹現れたので加藤は少し驚いた。白と灰色が混ざった毛色の犬。いや、加藤は気づいた。大きすぎる。これは犬ではない。おそらく狼だ。狼は加藤を見つめ、それからじりじりと近づいてきた。加藤はエアガンの銃口を狼に向けた。早速この銃を使う機会が得られた。加藤は引き金を引く前に、もしもこの狼が訓練された狼であつたらどうしようかと考えた。BB弾は狼には当たらず、壁に当たった。狼は何の動揺もせずに加藤に近づいてきた。

「くそつ」加藤はさらに撃ち、続けざまにもう二発撃った。なんだか情けなくなつた。これは所詮、玩具の銃と玩具の銃弾なのだ。しかし一発だけ狼に当たつた。狼の動きが止まつた。しかし、狼に怪我はなさそうに見えた。毛皮に覆われた動物には通用しないのだからかと加藤は考えた。狼は加藤に飛び掛つてきた。加藤はエアーカーンを犬に放り投げた。犬には当たらなかつた。狼は躊躇なく加藤に飛び掛つてきた。加藤は狼に押し倒された。狼が馬乗りになり、加藤の喉元を狙つてきた。この狼は間違いなく訓練されていると加藤は確信した。加藤は必死に狼の牙から逃れようとするが、狼の力は尋常ではなかつた。加藤は体を横にして、狼を下敷きにした。狼はもがき、加藤から離れた。加藤はそのまま狼の首を絞めるつもりでいたが、失敗だつた。狼はすかさず再び飛び掛つてくる。加藤が起き上がる前に狼は加藤の喉下を狙つてきた。恐怖が薄らいでいく。代わりに湧いてきたのは怒りの感情だつた。畜生なんぞに六十余年生きた歳月を終わりにされてたまるか。加藤は狼の喉元を掴み、渾身の力で締め付けた。狼の首は太く、毛皮のせいで思うようにはいかなかつたが、狼が加藤を襲うのを中断し、後退した。加藤は素早く立ち上がった。狼は加藤が強敵だとわかつたのか、しばらく攻撃するのをためらっているようだつたが、再び襲い掛かる態勢に入つた。狼が飛び掛つてくる。加藤はナイフを構え、そして狼の喉元に切りかかつた。狼の泣き叫ぶ声が出た。そして、狼は喉から血を出して倒れた。

加藤はナイフを落として息をついた。狼を見ると、もう虫の息だつた。自分を殺そうとした相手だが、命の灯火が消えかけた獣を見ると、哀れみがこみ上げてきた。加藤は狼の前に腰を屈めた。息が弱々しくなり、やがて死んだ。生気のなくなつた目はただのガラス玉のように見えた。加藤は立ち上がった。こんなことをしなくてはならなかつたのは全てここに連れてきた者達のせいだ。何者なのかはわからないが、何故こんなことをさせるのだろう、遊びにしても何かの実験にしてもあまりにも酷すぎる。加藤はナイフを拾つた。

血のついたナイフは捨ててしまいたいが、再びこんなことが起こる可能性は高い。空気銃はどうしようかと加藤は悩んだ。全く役に立たなかったわけだが。一応捨ておくことにした。勤にあげれば喜ぶかもしれない。

狼の死体をそのままにして、加藤は再び歩き出した。こんな障害があるのなら、この先には何か重要なものがあるかもしれない。歩き始めると加藤は自身の中に眠っていた、怒りが再び表面に現れたことに気づいて立ち止まった。必死だったとはいえ、もう長い間この感覚はなかった。というよりも、長く封印していたのだ。これは普通の怒りの感情ではない。醜い憎悪の感情だった。加藤は自分の中にあるその感情を恥じていた。

「もう終わったことだ」加藤は自分がそうつぶやいたことにも気づいていなかった。加藤は自分の手を見た。それから、首を振ると再び歩き出した。

単調な通路はそういう仕様なのか、だんだんと照明が暗くなっていった。加藤は段々と不安になっていった。こちらを脅えさせるのが狙いなら、その目論見は成功だな、と加藤は思った。照明は完全には暗くならないものの、暗い通路は薄気味が悪く、加藤は進むのを躊躇った。それでも進んだ。不安は大きくなるが、逆に好奇心は強くなった。一体この先に何があるのだろう。加藤は十分に警戒し、それでも毅然とした態度で歩いた。どこからか何かが見ているとしたら、こちらがこそこそした歩き方を見て笑い転げているかもしれないと思つて。

通路の先に扉が見え、そして加藤は扉を開けた。奥には予想通り小部屋があつたが、今までの小部屋と違って白い壁でなく黒で、机はなかった。奥の壁には鏡が一枚あつた。前進が見えるほど縦に長い鏡だ。そこに映し出されたのは加藤の全身で、加藤は自分の姿を見て、血が服に飛び散っている。気がつかなかった。気持ちが悪いは思わなかった。不可抗力とはいえ、動物を殺してしまったのだ。こういつた痕が残っているほうがよりその事を忘れないで済む。

だが……加藤は思った。一体全体なんで鏡なんかを？ 加藤は壁の右側を見た。赤い文字で何か書かれてある。

鏡は醜さも映す

何だか格言のようだと加藤は思った。それから、いらただしげに髪を掻いた。そして部屋を出ると、目の前の壁を蹴った。大した音はしなかった。足の爪先が痛んだ。

「一体何がしたいんだ！」加藤は天井を見上げて叫んだ。それから、ため息をついた。加藤は道を戻り、明るい場所に戻った。加藤はそこで面食らってしまった。犬の死体も、血の痕もどこにもない。加藤はすぐにその不思議に対する結論を頭の中で考え出した。なるほどと加藤は自己解決し、それから通路を戻り、迷宮の入り口に戻ると振り返って八つの通路の、自分が通った通路を見つめた。自分の記憶力に感心しながら、自分の部屋に戻った。昼食が用意されていたのでそれを平らげ、それから少し眠ることにした。今はとにかく頭を落ち着けることが肝要。彼はそう思い、ベッドに横になり目を閉じ、無理やり眠りについた。

逃走

全速力で走り、いくつかの道を適当に進んだがそれでも虎はついてきた。背後で爪が床に当たる音が聞こえる。義男と沙智子の体力は限界近くまで来ていたが、走るのをやめるわけにはいかなかった。だがとうとう沙智子が限界を超え、走るのをやめて苦しそうに胸を抑えた。無理もない、全力疾走なんてすぐに体力が尽きるものだ。義男は走って逃げるのは無理だと観念した。虎が通路に現れた。虎の息はほとんど乱れていないようだ。じりじりと義男たちになじりよってくる。

義男はナイフを右手に構えた。いざとなったらこれで対抗するしかないだろう、とは考えていたが、実際に虎を近場で見ると、どう考えても戦える相手ではないと思えてしまふ。

「義男さん、こっち！」沙智子が義男の背後で叫んでいる。振り向くと壁にある赤いボタンを押そうとしている沙智子の姿が目に入った。義男はわけがわからずに沙智子のところまで急いだ。虎がスピードを上げた。

義男は赤いボタンの隣に猛獣対策、緊急時にと書いてあるのに気づいた。沙智子がボタンを押した。すると鉄格子が沙智子と義男の目の前に落ちてきた。鉄格子は通路を完全に遮断してしまった。

虎は恐ろしい形相で二人をにらみ付けると、諦めたのかすくすくと引き返していった。

引き際が早いなと義男は全身を震わせながらそう思った。そう訓練されてるのかも知れない。

沙智子はその場に倒れた。

「疲れた」と沙智子は言った。

義男も疲れきっていた。沙智子を見習い、その場に座り込み、壁に寄りかかった。ナイフを使うことにならなくてよかったと思った。きつと刺す前に噛み殺されていただろう。

「とにかく一度戻ろう」義男は言った。沙智子はなんとか起き上がった。二人は地図を頼りに迷宮の入り口へと戻った。

懷郷

義男と沙智子は憩いの場へ向かった。憩いの場の扉を開けると満雄、勤、瑠美子、西岡がいた。四人は特に漫談をしているわけではなく、疲れた顔をしてコーヒーを飲んだり煙草を吸ったりしていた。彼らの様子を見ているだけで、彼らが迷宮探索をした後だということとがわかった。勤が義男を見て手で上げて挨拶をした。

「迷路にはいったのか？」

「はい」義男は虎に追いかけられた話をした。虎に追われた話をすると、勤たちは青ざめた顔をした。

「おいおい」勤が青ざめた顔をした。「冗談だろ？ 本当にそうなら危なくともう歩けないじゃん」

「虎か」満雄が虚ろな声を出した。「対策を考えないと」

「対策って？ お前に何か考えなんてあるのかよ」と勉。

「馬鹿にすんなよ。相手は所詮野生、勝てないわけではない」

とはいえ満雄が何か案を出すわけでもなく、一同はくつろぎながらそれぞれ、自分達の迷宮談を話し合った。勤たちは三人一組で行動し、それで犬を相手に苦労したようだ。満雄の腕には噛み傷があった。だが軽いものだ。義男は思う。虎に噛まれたら、噛み傷ですむだろうか。

「私たちも沙智子ちゃんを見習って地図作ったんだ」瑠美子が地図を沙智子に見せた。

「細かいですね」沙智子が入念に見て感想を述べた。

「こつち側とそつちで分担すればより早く地図が完成するってことだな」勤が言った。

「問題はあの犬だぜ。虎もいるっていうんだからな」満雄が言い、それからまた獣対策に戻った。

「私は結構いい護身用の武器が手に入ったんだけどね」西岡がそう言って、義男たちに何かを見せた。黒い何かバッテリー機のような

もの。

「スタンガンだ」勤が言った。

西岡が笑みを浮かべてスタンガンのスイッチを押し、先端に電気を走らせた。

「これなら犬なんて怖くないでしょ？」

「でもあの犬達やたら素早いのに」瑠美子が言う。

「あれは絶対訓練された犬だ。危うくこっちの喉を噛み切られるところだった」勤が言う。

「今度は全員一組で入ってみませんか？」義男が提案した。義男の中では絶えず黄色い毛皮をした猛獣のイメージが頭から離れなかった。もうあんな状況で遭遇するのは御免だった。「俺はもう少数で入るのは嫌です」

「数がいても、虎なんて出てきたらどうしようもないだろうな。スタンガンじゃ危険すぎる」

「確かにね」西岡が言う。「もつと信頼のおける武器があればいいってわけね？ 例えば銃とか」

全員が黙った。銃。確かにそれがあれば安全かもしれない。義男は拳銃を持った自分が虎を撃つところを想像してみた。だが虎は銃を撃たれてもひるまない。義男は背筋が凍りつく思いだった。試しに銃を猟銃に変えてみた。弾は外れ、虎はひるまず襲い掛かってくる。今度はショットガンだ。すると、虎は全身に銃弾を浴びて倒れた。勝った。

だが銃なんてどこにもない。警察が使うような拳銃が一つでもあればいいのだが。

「だけど銃なんて使える奴いるか？」満雄が言う。「俺はわかんねえぞ」

扉が開き、加藤が現れた。加藤のTシャツが朝とは違うということに気づいたのは沙智子と西岡だけだった。

「やあ爺さん。調子はどう？」快活に、勤が声をかけた。

「クソツタレだよ」加藤は荒々しくそう言い、コーヒを自販機か

ら取り出して椅子に腰掛けた。煙草を吸う少し周りが気味悪がっている様子を加藤は察したようだ。

「いや、迷宮でちよつとね。犬と戯れてたりしたもので」

「それで逃げてきたってわけ？」満雄がにやけて言う。

「ああ……そういうことかな」加藤は無理やり笑みを浮かべた。

西岡と沙智子が不審な目で加藤を見つめたが、加藤はそれにも気づいた。勘のいい女たちだと思った。服を着替えたただけだというのに。こちらが動揺しているのに気づいたということだろうか。それで加藤は言い訳を考え付いた。

「散々爪を立てられて服がボロボロになってしまったよ」犬を殺したことは黙っていたほうがいいのか、加藤にはよくわからなかった。なんといつてもあれは正当防衛なのだから。

「ねえ、義男さんと沙智子さんの話を聞いてあげて」西岡が言うと加藤は義男の顔を見た。義男は迷宮での災厄を話した。加藤は難しい顔をして思案した。しかし、うまい知恵は浮かばなかった。

「どうも色々危険が大きすぎる。銃や、せめて槍のようなものでもあればいいのだけどな」

武器があればいい。強力な武器が。義男は部屋に戻り、色々考えた。虎のことが頭から離れない。迫りくる大型の獣。倒すにはやはり、銃が欲しい。しかし武器が手にはいるのは迷宮内のみ。

義男はナイフを見た。照明を浴びてざらりと光るナイフは、動かすたびに輝きを変える。頼もしい得物だとは思う。しかしこれだけの獣とやりあう気にはなれない。ナイフが震えているので、よく見ると自分の手のほうが震えていた。

戦う前から負けている。迷宮に挑むのが心底怖かった。

沙智子は自室で義男よりも遙かに脅えていた。あまりに怖かったので憩いの場でしばらく動けず、他の連中が部屋に戻ったあともずっと部屋にいて、様子がおかしいと察した西岡が戻ってきて、部屋まで送ってくれた。

「すごく、怖かったんです」

「わかるわよ。あたしだったらその場で卒倒してるか、漏らしてるわね」

沙智子は枕を抱きしめながら眠りにつこうとしていた。時刻はまだ八時半で、食事をする気にはなれなかった。昨日までは迷宮探索がとても楽しいもの感じていたのだが。

枕を強く握りしめる。そして、義男のことを考えた。義男も自分のように脅えているのだろうか。きっとそうに違いない。

沙智子は起き上がった。義男の様子を見に行こう。話をすれば少しはこの震えも収まるかもしれない。沙智子は外に出ようとして自分が寝巻きに着替えていることを思い出した。慌てて着替え、部屋を出た。しかしそこで思いとどまった。九時になったら外にでるなという警告を思い出した。外にでることが躊躇われた。沙智子は仕方なく鍵を確認するとベッドに戻り、不安ながらも眠りにつこうとした。眠れなかった。目は冴えている。当然だ。普段は十二時頃に寝るのだから。まだ八時四十五分。こんな早い時間に寝られるはずがない。仕方なく再び起き上がり、テレビをつけた。なんとなく怖くて今まだ見なかったが、流れているのは普通の放送で、沙智子がたまに見るバラエティ番組がやっていた。適当にチャンネルを回し、それから最初につけたバラエティに固定した。なんとなく心が和んだ。そういえばシャワーを浴びているのを忘れていた。なんとなくお腹も空いてきた。少し落ち着いてきたのだろうか。沙智子はテレビをそのままに、食事を摂り、それからシャワーを浴びた。念のために果物ナイフを風呂の中に持っていった。そういえばホテルなどでは洋式のスタイルをとって風呂とトイレと洗面所が一緒になったっているが、沙智子には我慢できなかった。その点、ここはトイレと風呂が別なので、沙智子はゆっくりと風呂に入ることができた。シャンプーとリンスは安物だが、無いよりはましだ。熱い風呂は体と心の疲れを癒してくれるように思えた。心地がいい。

沙智子は親友たちのことを考えた。友人たちは自分がいなくなっ

てどうしているだろうか。特に仲のいい二人の友達。休日はいつも三人で買い物に出かける。かけがえのない親友。携帯電話が無事なら、ひっきりなしに電話とメールがかかっているはずだ。学校側もパニックになっているかもしれない。家も、そうだ。養母は自分のことを心配してくれているだろうか。きつと夜も眠れずに心配していることだろう。そういう人だ。自分を愛してくれている。実の母親よりも。養父も、そうだ。沙智子は風呂から上がり、髪を乾かすと寝巻きを着て、ベッドで横になった。寂しさに涙が出たが、今度はよく眠れた。

二章 過去、そして 退治

次の日、義男は九時におきて、朝食をとり、トイレを済ますと着替えて憩いの場へ向かった。揃っているのは男たちと、それから西岡がいた。男達は椅子に座らずに立っていて、三人からなにやら気迫めいたものを義男は感じた。

「君が来るのを待っていたんだ」加藤が言った。

「武器は持ったか？」勤が言う。

義男は首を振った。

「いいや。そつちからいくから。部屋に戻って取ってくればいい」

「迷路に入るんですか？」

「そうだよ。犬や、それに虎なんてものを片付けないと先に進めないからな。まず、沙智子君から地図を貰ってこよう」

「今日は獣狩りだぞ」満雄が言う。

「だけど、まともな武器がないのに……」

「いや、リーチが短いだけで、使えるのは結構あるぜ」勤が言う。

義男は躊躇した。昨日の今日で虎とまた対峙する破目になるとはいや、対峙するどころか逃げ惑うことになるに決まってる。彼らはあの恐ろしい動物のことがわかっていないのだ。実際に見たのは義男と沙智子なのだから。

「行かないのならいい。この三人でいくから」加藤が義男の顔を見て気遣ったのだが、義男は加藤が義男を根性なしだところちらを見なしたと思い、憤慨した。

「俺も行きます」

「虫や鼠を殺すのとはわけが違うんだぞ。動物殺したことがあるか？」勤が茶化す。

「あるわけないですよ。だけど、そつちも虎を殺したことはないでしょう？」

「そりゃないよな」満雄が笑った。「勉強だって何か殺したことがある

のかよ」

「あるわけないだろ」勉は一瞬、満雄に少し苛立った顔を向けた。一瞬だけだったが。義男は何故かぞくつとした。

「よし、四人で行こう」加藤が言う。

「気をつけてね……あんな迷路なんて入らないのが一番だと思うんだけどねえ」西岡が心配そうな声で言った。

「心配ないさ。我々は大丈夫。勇敢な三人の若者もいるし」

「虎の毛皮を持ってくるよ」勤が自信満々に言った。西岡は不満そうに首を振った。これが当たり前だと義男は思った。わざわざ心もとない武器で虎を殺しにいくなんて、危険すぎる。

「じゃ、いつてきますよ」加藤が西岡に別れを告げ、四人は憩いの場を出た。廊下を進み、沙智子の部屋の前に来た。

「義男君。沙智子君から地図を借りてきてくれないか？」

「わかりました」義男は沙智子の部屋の扉をノックした。しばらくしてから沙智子が顔を出した。沙智子は曖昧な表情を浮かべている。四人でしかも男だけだったので戸惑っているようだった。

「何です？」どことなく警戒した声。

「地図を貸して欲しいんだ。今から迷路の中に入るんだ」義男が慌てて沙智子の警戒を解こうとする。

「君の地図は素晴らしいからね。あれが必須なんだ」義男の後ろにいる加藤が口添えする。

「わかりました」沙智子は机に向かい、机の上においてあるノートをとって戻ってきた。義男はそれを受け取り、「ありがとう」と言った。沙智子はいいえと微笑んだ。

「戻ってきたら返す。どうもありがとう」加藤が言い、沙智子はうなずくともう用件は済んだと思つて扉をゆっくり閉めた。

四人は廊下を進み、義男は自分の部屋からナイフを持ってきた。奥の扉を開けて、迷路の入り口に出た。加藤は義男から地図を取るとそれを念入りに見た。

「あの子はかなり迷路を探索したようだな。よく今まで平気で済ん

だものだ。さて、虎が出る道というのはどこかな？」

「うる覚えですけど、昨日と同じ道を進んでみます」

「頼むぞ。お前が頼りだからな」満雄が励ます。

四人が歩き出した。四人は歩きながらそれぞれ自分が持っている武器を確認した。義男と加藤はナイフ。満雄はスタンガン。そして勤はナイフと槍を持っていた。槍は昨晩手に入れたものらしく、銀の細い棒で、先が太くなっていて、先端は鋭い。リーチが長い分、一番強力な武器になるかもしれない。あとは満雄のスタンガンか。義男はこの二人がうまく仕留めてくれるのを願った。自分のナイフで挑む気は昨日と同様、無かった。加藤の挑発（義男が思ったただけだが）など無視して残っていればよかった。義男は後悔した。

昨日の記憶と、地図を頼りに奥へと進んでいく。白一色の壁と天井を見ていても落ち着くことはなかった。義男はしきりに持っているナイフを眺め、これで戦う自分をシミュレーションした。そのとき一匹の犬が唐突に現れたのは義男にとっては嫌なタイミングで、彼は思わず大声を上げて腰を抜かしそうになった。そのどちらもあることはなかったが。

「早速現れたか」勤が槍を構えて先頭に出た。犬はドーベルマンで、しなやかな体つきをしていた。犬は何を考えているのか全く読めない、冷たく黒い目で四人を観察し、それから優雅とも思える華麗な俊足で一瞬のうちに勤を突き倒した。間合いから考えてみてもあまりにも不意の出来事で、勤はなぜ自分が倒されたのかわからず、パニックに陥っていた。勤が悲鳴のような声を上げた。「助けてくれ！」

加藤がナイフを持って犬の背を刺そうとした。そのとき、もう一匹のドーベルマンが加藤に襲い掛かり加藤はそれに気づかなかつた。ドーベルマンの跳躍は高く、その牙は正確に加藤の喉を狙っていた。動いたのは義男だった。無我夢中でナイフを突き出す。それがドーベルマンの横胸を突き、ドーベルマンは加藤に襲い掛かるのを中断して後退した。一匹が後退すると勤の手を噛み付いているドーベル

ルマンも後退した。二匹ともコンビネーションが取れているのだから、そう思つて二匹を見ると、いつの間にか三匹になつていた。一匹に見えたのは始めから彼らの作戦だったのではないか、義男にはそう思えてならなかった。

「くそつ、これはまずいぞ」加藤がナイフを構え、戦闘態勢で言つた。満雄がその右斜め後ろでスタンガンを構えている。義男も加藤の左斜め後ろでナイフを構えた。だからこんな得物でここに来るのは無謀だと言つたのだ。しかし今はそんなことで加藤たちに腹を立てているときではない。

「きやがれ、くそつたれ」満雄がぼそりと言つた。その顔はとても精悍とは言えない。武器を持つ手は震えている。

勤は大丈夫だろうかと義男が思つて振り返ると、加藤の後ろで勤が槍を構えていた。手は血だらけだ。

勤は義男の目線に気づき、覚悟を決めたかのように息を吸い、満雄の隣にきた。槍なら優勢になるはず、思わぬ敵のスピードに翻弄されたとはいえ、次は仕留める。勤はそう意気込んだ。

義男には、犬たちが笑っているように見えた。四人の武器を持つた男達を前に、余裕の様子で、それが怖かつた。

不思議なことに、犬達は飛び掛つてくることはなかつた。四人は固唾を呑んで相手の行動を待つていたが、犬達はきびすを返すとゆっくりと、毅然とした様子でその場を立ち去つて言つた。

突然の相手の戦意喪失に義男たちは戸惑い、しばらくその場で、武器を構えたまま、犬達が視界から消えた後も立ち尽くしていた。

「我々程度の相手などではいらねえ、といった感じかな」加藤が言つた。

「いや、さすがに四人相手だと不利だと思つたんじゃない？」勤が言つた。

どうも、不可解だと義男も思う。何か意味があるのだろうか。

「この道はやめておくか」加藤が提案する。

三人は賛成した。引き返し、別の道を探そうとする。しかしそこ

で、加藤が勤の手を見た。勤の傷口はそれほど深くはなく、血はもう止まっている。

「ちよつとまってくれ」加藤は勤の手を持ち上げ、持ってきた消毒薬で傷口を消毒し、それから包帯を巻いた。「応急処置だが」

「悪いね」消毒を浴びたとき、勉の顔は痛みで歪んだ。

「まだいけるよな？」満雄が心配する。

「大丈夫さ」

四人は沙智子の地図を眺め、別ルートを探した。かなり迂回することになるとわかった。地図通りに進んでいく。右方向に沙智子はまだ記していない道があり、勤が進んでみたいといった。満雄と加藤はあまり乗り気ではなかったが、渋々同意した。四人は右に折れた。それからさらに右に折れると茶色い扉が目の前に現れた。期待半分で勤が扉を開けた。扉の中は小部屋になっており、奥に緑の扉があつた。紙切れが一枚、床に落ちていた。勤がそれを拾い上げた。「また何かの警告のようなものか？」加藤は気にいらなそうな顔で聞いた。

勤はじっくりと紙を見ている。そしてそれを満雄に渡した。満雄は念入りに読み、それを加藤に渡した。加藤は見て、すぐに義男に見せた。

迷宮を徘徊する獣は十時から十六時まで出現する。それ以外の時間には出現しない。ただし、危険なのは獣ばかりではない。

「時間がわかつたなら、わざわざ退治することもないね」義男が言った。

「そうか？」と勤。

「これが正しい情報ならいいがな」加藤が疑う。

「この扉、中庭って書いてあるぜ」と満雄。

満雄の言うように、扉に掛かるプレートには中庭と書かれてある。満雄が扉を開け中に入っていた。光が溢れる。

「眩しい！」勤が目を覆った。

義樹たちも眩しがった。

満雄が感嘆の叫び声を上げた。

扉の中は陽光が立ち込めていた。義男は眩しさを我慢しながらそれを見た。間違いない。日の光だ。ここが出口なのだろうか。いや、中庭か。

中庭に入った。地面は土で、草木がびっしり生えている。広さはかなりあり、公園にあるような遊具がいくつか置いてあった。ジャングルジムがあり、ブランコがあった。自動販売機もあり、その側に白いテーブルと、周りに白い椅子が置かれてあった。上を見上げると、青い空に白い雲がたなびき、太陽が燦々と輝いていた。

勤と満雄がわけのわからない声を出しながら駆け出した。義男もそうしたい気分だった。彼は笑った。久しぶりに、心が晴れた気がする。外に出れたという期待とは外れたが、外と似た環境にいるといとは実に素晴らしいことだった。

加藤は満雄たちの反応に微笑みながら辺りを探ってみた。なかなかの奥行きがある。百メートルくらいだろうか。結局は四方を壁に囲まれているわけだ。大きな壁で、高電圧注意という看板がある。電気が流れているのだろうか。今流れていないとしても、よじ登ろうとしたらおそらく連中、つまり監視者はためらいもなく流すだろう。加藤は壁には触らず、三人のところについてそれを忠告した。た。

「ああ。逃げられないのはわかってるよ」と勉。

「だけどちよつとはましたよ。あんなせまつ苦しいところにいるよりは」満雄が言う。

「まあ、しばらくゆっくりしてもいいんじゃないかな」加藤は言い、獣狩りは中止だなと思った。

それからしばらく四人はそこで、まるで子供のように呑気に戯れた。

女達の話

義樹たちが迷宮にいる間、沙智子や西岡、それには憩いの場が集まっていた。女だけ三人というのはどうも不安だが、彼女達はその不安感を喋ることで紛らわした。

「ねえ、お二人はどこ出身なの？」話題が途切れたとき、西岡が訊いた。「あたしは神奈川なんだけど」

「あたし、埼玉」瑠美子が答える。

「あたしは千葉です」沙智子も答えた。

「みんな出身が違うんだ。同じ県に住んでるのなら、それだけで共通点があるんだけどねえ。関東圏ってことは一緒なんだけど」

「適当に連れてこられたってことなんじゃない？」瑠美子がどうでもよさそうに煙草を吹かす。

「でもねえ、なんでよりによってあたし達八人なのかね。たまたまだったら、運が悪かった、ということになるけど」

「運が悪かったんだよ、単に」瑠美子は断言した。「ところでさあ、沙智子ちゃん。あんたと仲のいい男の子、義男くんだけ。どう思ってたんの？」

「どうって？」

「こういうアクシデントがあると、恋が芽生えるもんじゃない？」

「いや……だって、とにかく今はここから出ることしか考えられないですよ」沙智子はそう言い、こういう状況でそんなことを言う瑠美子が信じられなかった。しかし、そんな思いとは裏腹に、義男の顔が浮かんできた。義男は確かに優しく、頑強な体つきではないが、どこか頼りがいがあった。今でも現実とは思えない虎との遭遇のときも追われたときだって、自分だけ逃げようとは思わなかった。

「こんなときだからこそ、お互いに協力しないと」西岡が言った。

「恋仲になるんだったらいいことだと思っわよ。どんなときでもね」

「ま、確かに、こんな話は今はどうでもいいことかもね」瑠美子は

煙草を消して立ち上がった。「なんか眠いみたい。しばらく寝る。寝てる間に男達が出口を見つけてくれればいいんだけど」

「おやすみなさい」沙智子と西岡が瑠美子に声をかけた。

瑠美子が去ると、二人はしばらく黙りこんだ。喉が渴いたので沙智子は自販機の中からコーヒーを選んだ。西岡も自販機の前に立ち、やはりコーヒーを選んだ。二人はコーヒーを飲み、くつろいだ。

「男の人たち、遅いですね」沙智子が言う。

「そのうち帰ってくるでしょう。不安？」

「ちよつと」

「あたしも。だってねえ、犬やなんかだったらまだましだけど、虎なんて危ないもの相手じゃあね。四人いるから大丈夫って問題じゃないし」

「そうですね。だけど、なんとかしないとここから出られないですし」

沙智子は焦っていた。一刻も早くここから抜け出したい。地図を作成していくのは楽しかった。完成に近づけば近づくほど、ここから抜け出せるのが早まる、と思っていたからだ。

「焦っちゃ駄目よ。まあ、若い子にこんなこと言っても無駄でしょうけど。あたしみたいな枯れた女じゃなくて、青春を謳歌してるんだもんね」

「ここから出られないと、親も友達も心配しますし」

「あたしの旦那も心配しているかもね。ま、女を自分の手足のように思ってる男だもの。少しはあたしの有難さが身にしみるつものよ。沙智子ちゃんは高校生だから、学校側も心配するだろうね。親も死ぬほど心配してるだろうねえ」

沙智子はうなずいた。「あたしの親って義理なんです。本当の両親はいないんです」

「そうなの」西岡は少しうろたえたようだった。西岡の目には、沙智子が苦勞知らずの少女に見えていた。「大変だったんだねえ」

「母親はだいぶ前に姿を消しました。私が小学校低学年の頃だった

と思います。原因は父の暴力でした」

ドメスティックバイオレンスという言葉が西岡の脳裏に浮かんだ。

「沙智子ちゃんのお父さんは、暴力を振るうの？」

「ええ。私にもたまに。だけど、父が暴力を振るい始めたのは母が
いい加減な人だったからなんです」

「いい加減？」西岡は顔を顰めた。妙な話になったものだ。まるで
テレビに番組のようだ。主婦の真剣な悩みを聞く司会者になった気
分。

「母はしょっちゅう父以外の男と付き合ってたんです。父はそれを見
てみない振りしていましたが、とうとう切れてしまって」

「どうしたの？」

「父は母を殴りました。それで、殴られた母は逆上して出て、帰っ
てきませんでした。金持ちの男と一緒に暮らし始めたということ
後で知りました」

沙智子は体がわなわなと震えていて、西岡は少し困った。沙智子
の体を震わせているのは哀しみなのか、それとも怒りなのか。彼女
には判断ができなかった。しかし西岡は彼女の肩を優しく触った。

「それで、父親のフラストレーションがあなたにも向けられたの？」

「少しだけ。だけど、父は哀れな人です。捨てられた、可哀想な人
なんです。父は私が中学生のとき、癌で死にました。そのあとで私
は父の弟の家に預けられたんです。すごくいい人たちです」沙智子
は涙が出てきた。あの二人は今頃必死で自分を探しているに違いな
い。それなのに、自分はこんなところで缶コーヒを飲んでくつろ
いでいるのだ。

「それなら、早くここを出て安心させたいわけね？」

「そうです」

西岡は優しく沙智子の背中を撫で、それからそれが余計なことが
もしれないと思って止めた。

「あの男連中はなかなか頼りになりそう。彼らに任せてしまえば安
心よ」

沙智子にはそれほど頼りがいのあるようには思えなかったが、頷いた。

そのとき丁度扉が開き、その男達が姿を現した。四人とも何かを達成したかのように、精悍な顔立ちをしていた。彼等の服は破れ、露出した皮膚に切り傷があった。

「お帰りなさい。おや、随分怪我しているみたいだけど」

「犬を相手にちよつと」勉が巻かれた包帯を見せた。「大したことない」

「それよりもいいところを発見したんだ」満雄が言う。

四人は迷宮でのことを二人に話した。

「面白そう。今度はあたしも入ってみようかな」西岡が興味を示した。

「さて、私は疲れた。休養を取ろうと思う」加藤は確かに疲れた顔をしていた。

「俺もだ。今日はもう満足だ」勉がいい、それから満雄を引き連れてこの場を去った。

「では、また」加藤も出て行った。

そのあと西岡もその場を去り、沙智子と義男だけが残った。義男は自販機からコーヒーを選んで取り出し、沙智子の横に座った。

「また迷宮に入る気になった？」義男は訊いた。

沙智子は考えた。時間帯を間違わなければ獣達と遭遇することはないにしても、完全な保障はあるのだろうか。それでも、地図作成のための探検は面白い。やってみる価値はある。時計を見ると六時を過ぎている。

「今から早速入ってみることにします」沙智子はそう言い、意気揚々と部屋を去った。

「俺はどうしようかな」義男は呟いた。迷宮内に入って疲れてしまった。訓練された犬とも戦ったので、精神的にもくたくただった。

しかし、沙智子一人だけ迷宮にいかえるのは気がとがめた。義男は沙智子の後を追った。

廊下を歩く沙智子が振り向いた。

「俺もいくよ」

「でも、今日は色々疲れたんじゃないですか？」

「独りじゃ危険だよ」

沙智子は少し躊躇したが、義人の気持ちを汲み取った。

疑惑

義人は沙智子を追うように迷宮を歩いた。沙智子は地図を見ないでも覚えてしまっているのか、迷わずにどんどん進んでいった。義人は迷宮内を探索するのにそれほど熱意を覚え、単に沙智子の後を追うだけとなった。

左右の分岐点に出ると、沙智子が始めて足を止めた。

「前は右にいつて、行き止まりだったから、今度は左へいつてみよう」沙智子はまるで義人が存在しないかのように独り言を呟き、左側へ進んでいく。義人は自分が空気が透明人間になったような気がしたものの、沙智子の背中を追った。義人は微笑んだ。女の子の背中を追うというのも悪くない。

奥には二つの扉があった。扉を開ける以外に選択肢はない。右と左、どっちの扉を開けるかだ。

「どうするの？」沙智子の背中に問う。

沙智子は義人の問いに答えず、右側の扉を開けた。義人は満足だった。自分も、右側の扉を開けるだろう。

扉の中は真っ暗な通路で、先は何も見えなかった。

「ライトがないと通れないな」

闇に、急に光が照らされ、義人は驚いた。沙智子が懐中電灯を照らしたのだ。どこで手に入れたんだろうと義人は思った。

「暗い」沙智子が呟く。

「通れそう？」

「なんとか」沙智子はライトを頼りに通路の中を進んでいった。

義人は勇気がある女だと感心した。なんだか自分は本当に用無しだったのかもしれない。義人は脅えながらも闇の中を進んだ。ライトの光は頼りないが、ないよりはましだ。奥へ進むと行き止まりで、二人はがっかりした。しかし義人は、右手に扉があるのを発見した。取っ手がついていたのだ。扉を開くと、明るいフロアが目の前に現

れた。義人はその中に入った。

フロアは広く、快適そうに見えた。だがフロアの中には何もなかった。がらんとしている。

「これは何のための部屋だと思う？」

「さあ……わかりません」

義人はフロアの中央に腰掛けた。歩きつかれたのだ。ため息をつく。

「今までこんな場所、あつたの？」

「ないですね」

沙智子はあちこち歩き回り、調べ、それから何もないとわかると義人の近くで腰を下ろした。

「少し疲れた」義人は呟いた。

沙智子が義人の体を労わるような目線をよこしてきた。

ようやく自分のことを意識してくれたら嬉しいと義人は思った。

さっきまではまるで義人のことを勝手にについてくる自分の影のように考えていたはずだ。

「二度も迷路の中に入ったんですから、疲れますよね」

「まあね」

二人はしばらく腰を下ろして、ゆっくりしていた。

「休憩するにはもってこいだね」。

「そうですね。そのための部屋なのかも」

義人は横になった。床は固く、冷たいが、気にならなかった。そのまま寝てしまっても構わないくらいだ。

沙智子も義人に習って横になった。天井の光が眩しい。

二人はしばらく横になった。沙智子は地図を眺めた。かなり埋め込んできたが、まだ出口は見えない。迷宮が想像を超える広さでないのなら、そろそろわかりかけてきてもいいのだが。

「こんなところ、早く出たいよな」義男がぼそりと呟いた。

「勿論」沙智子が当然だといわんばかりに応じる。

義男は起き上がった。そしてため息をつく。「だけどそろそろ戻

ろう。時間も時間だし」

沙智子は反対しなかった。「義男さんは今日色々あったんですから、ゆっくり休んだほうがいいと思います」

二人はきた道を引き返し、それぞれ自室に戻った。

部屋に戻ると沙智子は部屋の机に置いてある少女マンガを取り出した。新刊の少女マンガが山盛りに置いてある。一冊を取り出し、ベッドに横になりながら見る。読み終えるのに二十分ほど費やした。本を床に投げ捨てる。天井を眺め、どこに監視カメラがあるのだろうと訝る。それらしいものはどこにも見えないのだが。絶対に見つからないようなものを取り付けられているのだろうか。機械には疎い沙智子にはわからないことだった。まさかとは思うが、トイレには取り付けられてないだろうか。そういう趣向の変態が覗いているのかもしれない。

「汚辱されるんだ」沙智子はぼそりと呟いた。狭い室内にその言葉は嫌によく響いた。汚辱。しかし、なす術はないのだ。生きている限り生理現象は来る。今もそうだ。沙智子は起きあがるとトイレの扉を開け、素早く用便を済ませて出てきた。

「変態」沙智子は上を見上げながらそう呟き、不適な顔をして見せた。監視している人間なんて本当にいるのだろうかと沙智子は思った。もしかしたら、誰もいないのかもしれない。監視者がいないのと、誰もいない、自分たち八人だけしかないのと、どちらが恐ろしいだろう。わからなかった。

再び机を開ける。さっき読んだ漫画の続きの巻を読み始める。それから眠くなってきたので、本を床に　今度はそつと下ろし、眠りにつくことにした。眠る直前になって彼女は何かを忘れていたような感覚に陥った。何かを忘れていた。それが、関係している。直感的に沙智子は悟った。何かが関係している。偶然じゃない。

だが何が？　沙智子は眠った。

遊戯室

義男は起き、時刻を確認した。八時過ぎだ。朝食はとづくに用意されている。義男は起き上がると朝食をとり、食べ終わると今日着る服を探した。扉の奥には何着もの服が転がっている。別におしゃれをする必要はない。義男は適当に服を着替えて、整髪し、歯を磨き、外に出た。まるでどこかに遊びに行くような気分になり、義男は苦笑する。沙智子は起きているだろうか。みんなもう憩いの場に集まっているだろうか。義男は憩いの場の扉を開けた。

背の低い男 沢登以外、全員いた。当たり前だが六人全員昨日と服装が違う。義男は妙に感心した。勉はもう帽子を被っていない、さらさらした茶髪が見えた。

「おはよう」コーヒーを飲んでいた加藤が挨拶したので義男も返した。

「皆そろったみたいね」西岡が言った。

「あの人がいない 誰だっけ？」満雄が言う。

「ええと……沢登、だと思った」勉が答える。

「あの人ほとんど見かけないよね」瑠美子が言う。

「様子を確かめたほうがいいんじゃないですか？」聞いたのは沙智子だ。

「放っておけばいいよ。あんまり俺達のこと好きそうじゃないしさ」勉が言う。

「でも、孤立させるのはよくないと思うの。だって、ここではあなし達以外に喋る人間がいないわけだし。一日中誰とも喋らないなんて不健康よ」

「だけどすっげえやりにくそうな人だったしさあ」満雄が苦笑する。

「俺が後でコンタクトを取ってみよう」加藤が申し出た。「西岡さ

んも一緒のほうがいいな。男だけだと警戒するだろうから」

「いいですよ」

まるで犬かなんかのご機嫌を取りにくくようじゃないか、と義男は思った。なんだかおかしいことだ。こんな不幸な状況にあって、さらに不幸な人間のことにについて喋っている。呆れていると、沙智子がわかりますと言わんばかりの顔で見つめてきた。

加藤は足を組み、煙草を吸い、コーヒーを飲みと完全な寛いだ状態であった。彼は義男を見ると「今日はどんな予定だい？」と聞いた。

「別に」義男はその口調の気楽さに苦笑する。「四時以降まで暇してます」

「部屋には色々娯楽があるから退屈しないしな」加藤が気に入らなそうな顔で言う。義男には、彼が何に苛立っているのかわかった。娯楽施設が整いすぎているのが気に入らないのだ。まるでここではと遊戯をしているといわんばかりに。

「確かに四時まで迷路の中にはいけないし、まったりしてるしかないかな」勉はそういうと立ち上がり、自室に戻るのか出て行った。

「俺も」満雄も立ち上がり出て行く。七人は、五人になった。

義男は自動販売機からコーヒーを取り出し、椅子に座ると一気に飲み干した。それからこれから何をしようかと思案した。何も思い浮かばない。加藤と西岡を見ると、老人同士の会話を繰り広げている。状況が状況とはいえ、実に穏やかな光景だ。

「沙智子ちゃんは今からどうするの？」少し離れた場所にいる沙智子に聞いてみる。

「わかんないです」少し間を置いた後に沙智子は答えた。

自室に籠っているのも退屈だ。漫画もあるし、ゲームもある。だが今はそれほどしたいとは思わない。さて、どうすればいいだろうか。困った。

「私と西岡さんは二人で卓球でもしようと思っただけだ」加藤が義男に語りかけた。義男が困っているのがわかったかのようだ。「君たちもどうだい？」

卓球か。なるほど。その手があった。遊戯場には色々なものがあ

ったはずだ。卓球、ビリヤード、スロット、ダーツ、エアホッケー。

「いいですね」

「あたしはどうしょっかなあ」瑠美子がぼんやりとした声で呟く。

「ああそうだ、プールで泳ぐか」

「プールもあるんだと義男は思い出した。プールか。それもいい。」

「一人で大丈夫かな？」加藤が気遣う。

「確かに。少し怖いわね」西岡が同調する。

映画などでは、一人で泳いでいる人間は何者かに襲われる確率が高い。義男も少し心配になった。

「大丈夫。あの二人も誘うから」

瑠美子も出て行った。

「沙智子ちゃん、俺と卓球する？」

「いいですよ。あたし、卓球部でしたから結構できますし」

義男は卓球の経験がなかった。温泉卓球のレベルというわけにはいかないかもしれないと義男は思った。

遊技場に行くと四人はそれぞれラケットと玉を持ち、二台ある卓球台で玉を打ち始めた。加藤と西岡。義男と沙智子。加藤と西岡は非常に上手く、素人のレベルを遥かに超えていて、見ていた義男と沙智子は驚いた。とても老人のレベルじゃない。玉が肉眼でぎりぎり確認できる素早さで交互に飛び交っている。二人とも還暦を過ぎているとは思えないフットワークで動き、狙いどころのいいスマッシュを返している。

「お二人とも上手ですね」沙智子は感心したようだ。

「卓球もだが、バドミントン、テニスなんかには自信があるんだ。」

卓球は軽スポーツと呼ばれるけど、それは素人同士が戦うときの話だね」

「あたしは毎週土曜日の夕方、近所の小学校で卓球をしているの」西岡が言い、義男は納得した。

「あたし達もやりましょう」沙智子はすでにラケットと玉を持って

いる。

義男は構えた。「いいよ」

沙智子は義男の構えだけで力量を見破ってしまった。腰が全く落ちていない。構えもおかしい。少しがっかりするが、覚え次第ではすぐに遊べる相手になるかもしれない。沙智子は非常にゆっくりとしたサーブを放った。

義男はそれを返した。義男は喜んだ。玉はコートを超え、相手の陣地に落ちた。しかし沙智子はいとも簡単に打ち返した。ゆっくりした玉だった。義男はなんとかそれを打ち返した。沙智子はかなり加減して打っているかわかった。少し悔しかった。

沙智子は少し早い玉を打った。スマッシュには程遠い。しかし義男は取れないだろうと思った。

沙智子の予想通り、義男は玉を返すことができなかった。玉は義男の後方に転がっていった。

義男は小さい声を上げた。「ごめん」

「少し練習すれば上手くなりますよ」

義男は玉を拾い、それからサーブを放った。玉はコートに届かずに、自分の陣地に落ちた。義男は玉を取り、もう一度サーブをした。なんとか沙智子の陣地に向かっていった。沙智子はそれを簡単に返し、義男もなんとか打ち返した。

横では加藤と西岡が白熱した戦いを繰り広げている。結局、義男は沙智子の足元にも及ばなかった。

「沙智子ちゃん、ちよつと強すぎるな」

「卓球は得意です」沙智子は余裕の笑みを浮かべた。

加藤と西岡も決着がついたようだった。二人とも汗だくだが、実に恍惚とした表情をしている。かなりエキサイトしたのだろう。

「負けね」西岡はそう言うとその場に座り込んだ。「疲れた」

「いい勝負だった。またしたいな」加藤は笑った。

「二回戦はちよつと休憩してからにしましょう。こんなに激しく動いたのは久しぶりだから」

「私も少し疲れた。続きは昼食の後でもいいだろう。お茶でも飲まないかな？」

「いいですよ。コーヒータイムにしましょ」

「じゃ、二人で楽しんでな」加藤と西岡は遊戯室から出て行き、義男と沙智子は残された。

二人は他にすることもないし、また卓球を始めた。一時間ほど、二人は卓球をしていた。それから義男は喉が渴いたと沙智子に言った。

「あたしも乾きました。休憩所に戻りましょ」

二人は喉を潤しに憩いの場へ向かった。

プールで

瑠美子と勉それに満雄の三人はプールで遊泳を楽しんでいた。勉と満雄は黒のバミューダ。瑠美子は水色のビキニだ。最初勉と満雄は満雄の部屋で揃って漫画本を読んでいた。瑠美子が誘うと二人は喜んでついていった。三人は丁度よく用意されてあった水着に着替え、二十五メートルのプールを遊泳した。始めこそ水と戯れて遊ぶだけであつたが、それも退屈になり、三人は本格的に水泳を始めた。勉と瑠美子は泳ぎが上手く、勉はクロールで七十五メートル泳ぎ、瑠美子は平泳ぎで黙々と泳ぎ始めた。満雄は二人を見守り、ビートバンを使って一人遊んだ。

勉が泳ぎ着かれてプールの外に出る。椅子で少し休憩していると満雄が隣にきた。

「お前泳ぎ得意だつたんだな」

「まあな」勉は笑つた。懐かしい疲れが彼を包んでいた。この疲労感は悪くない。勉はすぐにまたプールに飛び込んだ。満雄は二人のように真面目に泳ぐ気にはなれなかつたのでその場で瑠美子を見ていた。いい体してやがると勉は思うが、平泳ぎで泳がれても背中しか見えないのであまり面白くなかつた。

瑠美子は五百メートルほど泳ぐと急にやめてしまった。

「何だか飽きちゃつた」瑠美子が言つた。

「もう上がるか？」と勉。勉も疲れ飽きてしまった。

二人はプールの外に出た。

「俺、もう少しここにいるよ」椅子に座つて快適そうな満雄が言う。「ゆっくりな」あいつ寝ちやうんだらうなと勉は思った。

更衣室で別れるとき、勉は瑠美子の肩を軽く叩いた。

「何？」

「水着姿いいなつて思つて」

瑠美子は思わず笑つた。そして、意地の悪そうな目を勉に向ける。

「そつちこそ、なかなかいい筋肉してるじゃない」

「これでも少しは鍛えたんだ」勉は瑠美子の形のいい胸を見ながら言った。瑠美子は全く気にしてないようだ。「後で触り心地を試してみるか？」

「何それ……あたしと寝たいってこと？」

「こんな狭苦しい空間で若い男と女がいてさ、することっていったら……だろ？」

てつきり勉は瑠美子が馬鹿にしたような顔でこちらを見ると思った。しかし、瑠美子は今の誘いを考慮しているような顔つきをした。「今晚そつちいくから。いい？」

「おお」マジかよ？

「あなたの相方と一緒になんていないでね」

「勿論。一人でいく。二人なんて嫌だろ」

「それでもいいんだけどさ」瑠美子は悪魔のような微笑みを向けた。「あいつ、タイプじゃないの」

勉はにやりとして微笑みながら頷いた。満雄はもてない。そんなことは満雄本人も自覚していることだ。

「必ずこいよ」勉は念を押した。

「あなた眼鏡ないほうがいいんじゃない？」瑠美子は去り際にそう言った。

二人が去ると満雄はため息をついた。プールなんてきても別段面白いことはない。女はいるが、こちらに興味はなさそうだ。金を払えば行為に及べそうな雰囲気はあるが、先立つものはこの場所にはない。が、何か良い条件を付ければ……おそらくあの女は簡単にやらせてくれるだろう。そういう女だ。

あの沙智子って女の子。彼女もまた可愛いが、あつちは完全にタイプが違う。セックスを要求するなど全くの無意味だろう。それにあの義男っていう奴と仲がいいようだし。

いつまでこんなところにいるのかはわからないが、いる間は楽し

まないとならない。それが人生を楽しむコツ。満雄はこの状態でも、状況を最大限に生かすつもりだった。セックスもそうだ。だが当分は女にありつくことはできないかもしれない。しばらくの間は。満雄は一人笑った。椅子から起き上がる。時間はすぐに過ぎる。せっかく娯楽を提供してくれているのだ。楽しまないのはもったいない。足音を聞きつけて満雄は考えるのを中断した。誰だろう。こちらにくる。勉たちがもどってきたのだろうか。足音は大きくなる。更衣室のほうからだ。扉が開いて、プール場へ何者かが現れた。満雄は足音の主を見て、悲鳴を上げかけた。

沢登が早足で満雄の目の前にきた。隈のできた血走った目で満雄を睨み付けている。小柄な男は右手にどこから手に入れたのか鉄の棒を持っている。

「なんだよ、脅かすなよ」満雄は凄んだ。

「化け物に会ったんだ」沢登が呟いた。

「何だつて？」

「化け物だ。お前達は化け物に殺される。俺は、そうはならない。

俺は生き延びるんだ」沢登はそう言い、絶叫しながらプールの周りを走る。それから立ち止まり、再び満雄を見た。

「化け物だ。化け物がここのどこかにいるぞ」

「わかったよ。どうすりゃいいんだよ？」満雄は少し怖がっていた。この男は危なすぎる。完全に常軌を逸している。

「逃げるしかない。でも無駄だ。お前らは殺される。これは天罰だ」

「何の罰なんだよ？」満雄は背筋が強張るのを感じた。

「神罰だ。裁きを受ける。ミノタウルスがやってくるんだ」そう言うのと沢登はきびすを返し、プールから去っていった。

なんだかわけがわからずに満雄は呆然としてしまった。それから、何故か一人でこのプール場にいるのが怖くなり、慌てて外に出た。

卓球勝負

義男と沙智子は休憩を入れてから一時間ほど卓球を続けた。義男は最初とは比べ物にならないほど動けるようになったと沙智子に褒められ機嫌が良かった。沙智子が本気を出すとあっさり負けてしまふのだが。

「全然相手にならなかったけど、楽しかったよ」義男は微笑んで言った。疲れたが、心地のいい疲れだった。

「また相手してくださいね」

勿論そのつもりだ。早ければ今日の夜か、明日の同じ時間にもまたやればいいと思う。沙智子がイエスといえば。

二人は遊技場から離れて憩いの場に戻った。コーヒータイムを終えたのか、加藤と西岡がいる。二人が戻ったすぐ後に満雄が扉から現れた。満雄はどこか動揺している顔で、先ほどのことを語った。「化け物って具体的には言ってくれなかったの？」西岡が聞いた。「うん。化け物としか」

「それで、沢登さんはどこへいったんだ？」加藤が聞く。

満雄は首を振る。「わからない」

五人は黙った。化物。殺される。不吉な単語だ。何か自分達を狙っているのかもしれない。狂犬でもない、何かが。

「あの変態野郎」満雄は憤慨したように言う。「あんな奴野放しにしてたら危険だと思う。ふんじばってどっかに監禁したほうがいい」「そんなことは駄目よ。ちょっと恐怖で精神が参ってるだけなんだから」西岡は咎める。

満雄は椅子に座った。「あんなのが今までどうやって社会生活を送ってきたのか、不思議だよ」

確かにと義男は思った。最も、会社の中には色々な人間がいて、はけ口を見つけて自分を抑えて生活しているものだが。彼もその一人で、会社では最低限普通を装って暮らしていたのかもしれない。

とりあえず一同は自室に戻った。義男だけが一人、憩いの場に残った。加藤たちは午後からまたスポーツをするようだ。結構なものだと義男は思う。こんなところで遊んでいる場合じゃない。焦りは募る。午後の四時までは迷路の中に入れないとはいえ、これではこの迷宮に連れてきた連中の思いつぼだ。しかし考えてもいいアイデアは出ない。義男はさすがごと自室に戻り、ベッドに横になった。軽く仮眠すればいいアイデアも浮かんでくるかもしれない。まだまだ自分は楽観的なのかもしれないと自嘲しながら、義男は軽い眠りに入った。

自然に義男は起きた。時刻は丁度一時。義男は起き上がり、外に出て憩いの場に向かった。加藤たちは今頃卓球をしているだろうか。憩いの場には沙智子が一人でいた。

「他の皆は？」

「加藤さんと西岡さんは卓球してます。他の人たちは知りません」
もしかして沙智子は自分を待っていたのだろうかと義男は思った。「まだ一時だし、卓球以外にも色々あるよね。適当に回ってみようか？」

「いいですよ」

沙智子が乗り気だったので義男は沙智子と一緒に遊戯室へ向かった。

遊戯室の奥の部屋で加藤たちが卓球をしている音が聴こえてくる。義男はすぐ目に入ったエアーカーに引かれた。学校に通っているときに友人とやったことがあるのを思い出す。よくテレビでやっているのを目にすることもあった。

「これやってみようよ。久しぶりだ」
「いいですね」

二人はエアーカーをしだした。どちらも似たようなレベルで、義男はこちらでは勝つことができた。白熱していると、加藤と西岡がきた。なので四人でボーリングをした。ボーリングでは義男が一番スコアを取った。義男は楽しんでた。すっかり状況を忘れてし

まうほどに。

いつのまにやら四時が過ぎていた。

「時間だ。今度もまた遊びのようなもんさ。迷路の中をさ迷って、出口を見つけるんだ」

「どれもそうだけど、真面目にやらないと何も物事は進まないものよ。遊びにも一生懸命さがないと」

四人は打ち解けたのか、四人一緒に迷宮の中を散策することにした。

「沙智子君の地図はかかせないよ」と加藤。

「留美子さんたちは？」沙智子が聞いた。

「好きにやるさ」加藤が答えた。

獣が現れないとわかっていても義男と加藤はナイフを手放さなかった。いざとなったときに武器ほど頼れるものはないと二人は思っていた。

沙智子の地図は加藤のいうように、彼らにとって必須のものとなっていた。彼女の地図もだいぶ埋まったが、まだまだ迷宮内には探索していない箇所が沢山あるようだった。

血飛沫がが壁や床についた場所にくると四人は立ち止まってその様子を眺めた。

「何があつたんだろ？」義男はそう口に出した。

「さあな」加藤は低い声で言った。彼にはわかっていた。犬を殺した場所だ。

沙智子と西岡の顔が翳っている。二人とも血に、何か不吉なものを感じていた。

加藤が突然笑い出した。義男は思わず加藤から離れた。

「おかしいと思わないか？ こんなことは馬鹿げてる、と」

「何が？」西岡はきよとした顔で加藤を見た。この人、突然何をと不審に思う。

「何もかも滑稽だ。我々は迷路の出口を探り当て、外に出るつもりでいる。しかし連中がそう簡単に外に出させるだろうか。仮にだ、

迷路の出口なるものがあつたとしても、我々を監視している連中はそれを阻止しないものだろうか。全てが無駄な足掻きかもしれない。それならどうする？」

「簡単よ。それでも、悪あがきをするの。あなたもさつき言ったじゃない。遊びだと思えばいいの。これもね、さつきの遊びの続きなの。スポーツの一つ。散歩よ。迷路を散策しながら足腰を鍛えるの。歩くのは脳にもいいんだから。こんな面白そうな場所を歩き回れるって、結構楽しいことだと思わない？ 極論だけど、人生は壮大な遊びでしょ？」

人生は遊び。義男にはわからなかった。自分の人生は、遊びで語られるものなのだろうか。語るほどのことがあつたらうか。

何だろうか。もやもやする。義男は考えるのをやめた。今は加藤だ。急にどうしたというのだろうか。

「あんたのいいたいことはわかる。ポジティブな発想の持ち主だからな。だが私は監視者の手のひらで踊るような真似はしたくないんだ。例えこの私の考えも連中の想定の内だとしてもだ。私は私で色々試してみようと思う。一つは、何もしないことだ。将棋盤の駒が動かないとしたら連中はどういった行動に出るか、気になるね。そういうと加藤はもときた道を引き返していった。

「戻るかしら」西岡がぼそりという。

「あの人なら大丈夫だと思えますね。だけど、急にどうしたんだろ？」義男は首をかしげる。

「なんだか急に老け込んだみたいな顔してたね」沙智子が言った。

もともと年寄りだけだと義男は思う。「ちよつと……陰気な雰
囲気になつたね。唐突に」

「わからないわねえ。何もしないってというのが一番辛いのに」

それでも三人はしばらく探索し、やがて西岡が疲れたと言いつたので探索を打ち切ることにした。義男は時計を見た。時刻はいつの間にか六時を過ぎていた。

「あとで食事を一緒に食べない？」西岡と別れ、自分の部屋に戻る

うとしたときに義男は思い切って沙智子を誘ってみた。

「いいですけど、どこで？」

「食堂がいいな。あそこなら誰もいかないだろうし」

「何時ごろに？」

「食事の時間になつたらすぐに。そっちの部屋いこうか？」

「すぐ出ますから大丈夫」

「わかったよ。じゃあ、時間になつたら」

部屋に戻ると義男はベッドに横になった。なんとなく、気だるい。加藤のことが気になった。憩いの場にいつてみようか？ しかし沙智子もいくかもしれない。何度も出会うのも妙だし、止めておくことにした。あと二時間ある。しかし特に何もしようとも思わない。ゲームをする気力はない。とりあえず二度ほど繰り返した漫画本を再び読むことにした。そんなことをしているうちに八時になった。かすかな機械音がする。壁のボタンを押すと一部が飛び出し、その中に弁当とお茶が用意されてある。早速それを取り、外に出る。沙智子の部屋の近くになると、扉から沙智子が顔を出した。

「今晚は」義男は微笑みかけた。

「どうも」沙智子は微笑んだが、義男ほど嬉しそうではない。義男にはすぐにわかった。沙智子は焦っている。何をするにも、焦っている。遊びをするにしても、心から乗り切れない。それもそうだ。一刻も早くここから出たいのだから。

食堂はがらんとしていた。広いスペースを使っているが、誰も利用していないようだ。加藤たちは一人で食事を取ったのだろうか。

「誰もいないんですね」

「うん。皆と一緒にのほうがいい？」

「どっちでもいいですけど、なんだか寂しい感じですよ」

そういわれると義男は少し悲しくなった。「だけどさ、一人で食べるよりいいでしょ？」

「そうですね」

義男は何となく敬語を使われるのがうっとうしく感じた。だが敬

語をやめてくれというのも気がひける。向こうも敬語を使うのはやりにくいだろうか。高校生なのだ。もっと気さくに話かけてもらっても一向に構わないのに。

「俺達八人がこうやって拉致されたのって何か理由があると思う？」
義男は聞いてみた。こんな会話は不毛だとも思ったが、かといって全く触れなくてはいい話題ではないだろう。

「そうですね……何らかの理由があるにしても、私にはわかりません」

「そうだよ。俺達八人って年齢も違うし……何か共通点があるわけでもないし」

言ってみて義男は思った。共通点か。何か八人に共通点があるとしたら、ここに拉致された理由につながるかもしれない。勿論、何か理由があるとすればだが。

「焦ってもここからは簡単には出られないかもしれない」義男はため息をついた。

沙智子の食が止まる。「何ですか？」

沙智子の雰囲気が変わったので義男は失言したかもしれないと思った。「加藤さんの言っていたことも一理あると思うんだ。連中ここに俺達を連れてきた奴らが簡単に俺達を逃がしてくれるとは思えない」

「じゃあ諦めるんですか？」

「いいや」しばらく間を空けたあとで義男はそう答えた。「諦めるなんて、そんなことはないけど」

「じゃあ、頑張って迷宮の出口を探したほうがいいと思います。結局、それしかないじゃないですか」

義男は頷いた。沙智子の押し殺した威圧に少し押されるが、こっちもここに安穩としていたいわけじゃない。思いは同じだ。自分だけがまともだというような態度は腹が立つ。

「ここから出たい気持ちはみんな同じだと思うよ」

「そうかな？　どっかみんな冷めてる。必死でここから出るって感

じに見えないんですけどね」

「でも沙智子ちゃんだって卓球楽しんでただろ？」

沙智子は義男をあざ笑うかのような顔つきで見た。

「まあ、多少身体は動かさないとなまってしまえますもんね」

義男は笑った。なんだか不愉快だった。沙智子に馬鹿にされてる。

このままでは済まさないぞ。義男は沙智子の自分に対する評価を高めさせてやると心に誓った。

こんなことをいつまでも話あっても仕方ないと思ったのか、沙智子は話を切り替えた。「義男さんってここに拉致される前はどんな仕事してたんですか？」

仕事？ 俺の仕事か。義男はどこか自嘲的な気分になった。仕事のことなんて思い出したくない。

「パソコンの……エクセルを使った、簡単な仕事をしてたよ」

こういうと綺麗なオフィススの職場を想像するだろうか？ 実際は埃だらけの汚い作業場で黙々とパソコンをいじっていたに過ぎない。パソコンも信じられないほど古くさいものだった。

「へえ。事務員みたいなものですか」

「まあ、そんなところかな」義男は笑った。「沙智子ちゃんはどんな仕事につきたいの？ 高校三年生だっけ。じゃあ今から大学受験だね」

「迷ってるんです。短大で済ませたいんですけど、教師にはそこそこの成績はいいから、四年制に進めって言われてます」

「大学いきたくないの？」

「なんか……ちよつと違うかなって。四年も勉強したくないっていうか。就職して好きな服をたくさん買いたいたいっていう気持ちもあるかな」少し照れたようにはにかみ笑いをする。

後悔しない道を歩むといいよ。なんて台詞は義男には口が裂けてもいえないだろう。偉そうにいえる言葉など一つもない。確かに沙智子はそれなりに理髪そうな娘だ。だが四年制大学に進んで何かをやりたいという気概はないようだ。それなら、就職して早く自立するのでもいいかもしれないが。

「でも四年生の大学卒業しとけば選択の幅は上がるよね。いけるならいつておいても損はないかも。服ならバイトして買ったたりできるしね」

「そうですね。でもね、ここでそんなことを言い合っても仕方ないですよね？」

それもそうか。義男は笑った。「ごめん。笑い事でもないか。本当に、ここから出ないといけなくなって今思ったよ」本当にそうだろうか？

「ちよつと今日は遊びのほうに力を入れすぎちゃった気がします。ここを出ないと大学受験も就職のことも洒落た服も意味がある事柄ではなくなっちゃいますね」

「そうだね。明日は本気で取り組むよ」

そうだったが、自分でもどこか口だけのよくな気がしてならなかった。

加藤と迷路へ

次の日は妙にだるい目覚めだった。今日でここにきて何日目だったか？ そんなことが頭をよぎる。昨日は沙智子と一緒に食事をして、それから適当にゲームをして眠ってしまったのだ。憩いの部屋でビールを飲んだからだろうか。酷い気分だ。かなり寝たはずなのだが、虚ろなまま迷宮散策でもしてたのではないかと思ってしまう。

とりあえず軽めの朝食をとる。フレンチトーストにスープ、野菜サラダというまずまずの朝食を終えると着替えて部屋の外に出た。憩いの部屋の近くではすでに話し声が聞こえてきていた。扉を開ける。

「おはようございます」

「よう」 勉が陽気に返してくる。顔つきを見ると、どこか機嫌がよさそうだ。

「これ見てくれよ」

同じくご機嫌な様子の満雄が義男に何かを見せた。それは札束だった。福沢諭吉が二十枚はあるかもしれない。

「どうしたんですか、それ」

「パチンコだよ。遊びのつもりで打ってたらさ、かなり景気がよくてじゃんじゃん玉でてさ。なんとそれが現金にかえられたんだ！ すごいだろ？」

「ここでは役に立たないっていつてるのに、嬉しそうにしちゃって」 瑠美子が呆れ顔だ。

「まあそうだけどさ。だけどすぐくねえか。タダで打てるのに金が入るんだぜ？」

「むしろそのくらいの特典はあってしかるべきだと思うがね」 加藤が言う。

義男は愛想笑いを浮かべておく。瑠璃子の言うとおりだ。こんなのはここでは何の役にも立たない。金が十万だろうが、百万ほどに

増えようが、どこか虚しい。

加藤、勉に満雄に瑠美子。西岡と沙智子の姿が見当たらない。沢登は当然いないから、それは自然なのだが。

「今日も探索するんでしょ？ 沙智子ちゃん、もういつちゃってるよ」瑠美子がにやけた笑みを浮かべながら義男に教えた。

昨日は沙智子に本気で取り組むといっってしまったのだ。昼まで迷宮をさま迷うのは使命なのだろう。今は八時。まだ早い。少し落ち着いてから取り組もう。

「まずは朝のモーニングコーヒーを飲まない」と

「俺たちも後でいくよ。一時間ほどパチンコ打ったらな」勉がにやる。

義男は加藤を見た。昨日は様子がおかしくなった加藤だが、今日はいつもとおり、冷静なように見えた。

自販機からコーヒーを取り出す。タダだからといって感謝する気には当然なれない。思えばサービスの食事も、当然のように食べていたがそれを食べるというのは相手の思う壺ではないだろうか。しかし食事はとらないと、餓死してしまう。難しいところだ。難しい状況だ。沙智子が一刻も早く脱出を図るのも当然と言えた。大体、こんなところで暢気にパチンコの話をしているこの連中がおかしいのだ。

空き缶をゴミ箱に投げ捨てる。

「じゃあ俺、ちよつと迷路に入ってきます」

「出てこれないなんてことがないようにな」満雄がからかった。

「冗談じゃないです」

「冗談ではないとも。迷って午後の四時を過ぎたりしたら事だからな」加藤が半ば真剣な様子だ。

「大丈夫です」

義男はその場を離れ、迷路の入り口にきた。一人で入るのはなんだか久しぶりに感じた。沙智子に対して少し腹が立った。迷路の詳しい地図は彼女が持っている。彼女は地図作成。自分はパートナー

として彼女を守る。そんなことを期待していた。だが彼女は義男のことなどかまわずに迷路の中に入ってしまった。彼女から信用されていない、頼りにされていない、相手にされていないという思いが頭の中を巡る。

そして理解したことがあった。

義男はどうするか思案する。闇雲にいつてもいいが、加藤たちのいとおりに帰ってこれなくなったら困る。だが、きた以上は進むほかない。まさかこのまま戻って昨日のように遊びに没頭するわけにもいかないし、かといって沙智子の帰りを待つのは格好がつかない。小さなプライドを守るため、彼はどこか及び腰で八つの入り口のうちの、一番左端、八番目の通路を進んだ。まっすぐまっすぐ進む。一本道は右へと曲がりそれから正面か右斜めの選択になる。そのときふと義男は沙智子の言っていたことを思い出した。そうだ！ 壁を見る。本当に沙智子は有能だと実感する。正面は×印のペイントがつけられている。正面にいつても何も無いという合図だ。義男は沙智子に感謝して右方向へ進む。しかし沙智子がすでに開発した方向へいくというのはどこか引っかけだった。彼女は優秀だ。何よりここから早く出たいという強い意思がある。そんな沙智子の通った道を進むしかないのだろうか、自分は。義男はどこか曇った気持ちで隠しきれずに、しかし沙智子の記した正解の道を興味本位で進んでいった。

突き当たりには右への曲がり角。義男は予感した。やはりどこにいつてもどこかで同じ場所にぶつかるのだろうか。

沙智子も同じ迷路を一人歩いているのだ。義男は勇気を持って曲がり角を曲がった。とたんに犬に遭遇したという経験がトラウマとなっていたが、何も出てこなかった。途中で左右に扉があったが、両方とも×がついていた。扉の中はおそらく小部屋になっているはずだ。沙智子がすでに入っていて、その中にあるもの、情報をすでに取っているから×がついているのだろうか、義男はどんな部屋なのか気になったので両方開けてみることにした。もしかしたら沙智

子の見逃しがあるかもしれないし、一度入った先が変わらず同じ状態だというのは確定していない。

右の扉を開いていみたが、がらんとした本当に小さな部屋があるのみだった。まったく何も無い。天井にも何も無い。ライトが点灯しているのみだ。

今度は左の扉を開けてみる。机があった。しかし引き出し類が空っぽになっていた。引き出しの中が空なのでなく、引き出しがないのだ。天井にはライトが点灯している。扉を閉めた。

進む。突き当たりを左へ。今きた道を平面地図に思い描く。西へ向かい、だんだんと北へと向かっている。まだまだ引き返すほどきではない。時間も余裕。このまま突き進んでみる。

左右に分かれ道。右側にも左側にも×印はない。どちらを進んでもいいということだが、義男は悩んだ。どちらに進んでもいいということとは、結局どちらも同じ道に合流するということだろうか。それとも沙智子がまだ探索途中で判別つかないということだろうか。どちらもありえるが、とりあえず義男は左に進んでみた。そういえば、と義男は思った。迷路というのは法則があり、壁に沿って進めば確実に出口へと進めるというものがあった。ほかにもういろいろやり方があるが、扉があるぶん壁沿いに進むというのは難しそうだ。「おや」声が出た。義男は思わず声が出そうになるほど驚いた。声の方角には加藤がいた。何でこんなところに加藤が？ 義男は目の前にいる加藤を見て不審に思った。まるで目の前の加藤が偽者ではないかというように。

「どうやら合流地点だったらしいな。何番目から入ったんだ？」

「八番目です」

「こっちは一番目だよ」加藤はにっこりした。「沙智子君は見つからないかい」

「見てませんね。ここも広い迷路だから」

「ただどうこうして鉢合わせになる程度の広さだよ。まだいくんだろっ？」

「いけるだけいつてみます」

「同道していいかな？」

「もちろん」

とはいえ加藤と二人より沙智子と二人のほうがよかった。沙智子はどこへいるのだろう。

二人は一緒に歩き出した。なんとなく気詰まりがするのは一人で行動するのに慣れてしまったせいだろうか。どことなく、鬱陶しいような、かといって一人よりはましだというような思いが交錯する。「まだ若いんだ。こんなところに閉じ込められるのはいやだろう？」「そりゃそうです。加藤さんもそうですよ？」

「そうだな。やりたいことは多々あるんだ。今はボートに乗りたくてね。免許を取得しようと頑張っていたところだった」

ボートか。その年で頑張るもんだ。義男は感心したが、どこか不快なものを感じた。

「すごいですね。でも高いでしょう？」義男はしまったと思った。もしかして加藤はかなり稼いでいる身分かもしれない。

しかし加藤は笑った。

「そのために貯めてるよ。三百六十度見渡す限り海っていうのはいいもんだと思うだろ？」

燦燦と照らす太陽。まわりはすべて青い海原。はるか先には地平線。サングラスをかけ、太陽の光を浴びながら気持ちのいい昼を過ごす。悪くない。

「いいですね」

「色々煩わしいことを忘れるのにはもってこいだと思ってね」

一瞬、義男は何か不快な気分を味わった。何だ？ 加藤の顔はどこか憂いを帯びている。皺の刻まれたその老いた顔を見ると、過去の何かに囚われているのだろうと思う。

「牢獄は結局、自分の心が生み出すんでしょうね」義男は加藤に言うというよりも自分自身に言い聞かせるようにいい、自分で言ったことに驚いた。

「いや……」なんでそんな台詞をいつたのだろう。

加藤が驚いた顔をする。「そうだな……そのとおりだと思つよ」
加藤が足を速める。「だけど人間はどんな障害も乗り越えられると思つ。思いたい。君たちと違って老いた私にはこの状況はそれほど不愉快ではない。外の景色も中庭を見れば少しは救われる。娯楽もあるし、同じ境遇の連中と語りもできる。だけど、いつまでもこうしてはいけないだろうな。それでは、自分という存在を軽んじるようで、いやなんだ」

加藤の背中語り、義男は加藤の背中を追つ。

「迷路なんてどんなに広くつたつて、限界があります。たぶんもうすぐ出られますよ」

「かもしれないが、私達をここに送つた連中がそう簡単に出してくれらると思つかな」

それが一番の問題だ。義男はうなずく。

「加藤さんの奥さんは心配しているでしょうねえ？」それとなくたずね、加藤の家庭の事情などを聞いてみたかった。単純な好奇心だ。「妻はもう他界したが、あの世で心配しているかもしれない」

「すいません」

「いや、いいんだ」

他界。義男は聞いたことを後悔した。しかしどうして死んだのだろう。病気だろうか追求するのはためらわれる。子どものことなども訊いてみたいが、これ以上の質問は避けた。

「曲がり道だ」義男はごまかした。

左右の分かれ道。正面にもいけるがすぐに突き当たりとなっている。扉などもなさそうだ。×印は右になっている。右に行くほかないだろう。

右へ。沙智子は今頃どこにいるだろうと義男は思った。こうしてあてどなくうろつくよりも地図を見て検討をつけて歩いたほうがずっと効率がいいのに。次に会ったら地図をコピーさせてもらおう。と、思っていたら加藤がおもむろに地図を取り出した。

「確かに、左にいつても袋小路に行き着くだけのようだよ」

「それどうしたんですか？」義男はたずねた。

「沙智子ちゃんのと瑠美子君のを照らし合わせて作ったんだ。なかなか便利だよ。特に瑠美子君のは意外だったな。沙智子君のと同じくらい丁寧に作ってあった」

「それ、あとでコピーさせてもらっていいですか？」

「いいとも。そういえばプリンターがあつたな。部屋にあつたのにうっかりしていたよ」

加藤はプリンターの存在を失念していたらしい。地図は手書きだった。だがパソコンで作成するよりはずっと楽かもしれない。

「見たところ地図は六十パーセントほどできているようだ」

地図はこの先のこともかなり記載されている。問題は、この先に進んでも地図の記載をさらに増やすことができそうもないということだ。この先の地図はかなり先まで進んでいるし、それ以上進むと時間がオーバーしてしまうかもしれない。選んだ道は失敗だったのだろうか。

義男はそれを加藤に伝えた。

「いや、どうもそうではもないようだ。すぐにわかる」

二人は扉の前にきて、その扉を開けた。扉の先にはエレベーターの中のような小さな部屋があり、部屋は丸かった。二人はその中に入った。中には何もなく、エレベーターのように上昇と下降のボタンが付いてあるわけでもない。

「ターnteーブルだ」加藤が呟いた。

部屋が回転を始めたので義男は驚いたが、すぐに慣れた。何かの罨ではないかとも思ったが、床は回転しただけだ。扉は見えなくなり、そして別の扉が開かれた。加藤が扉を開けると、先ほどとは違う、薄暗い通路が奥まで続いている。

「回転床」義男が呟く。

「そう　　だけど地図を持ってるから、わけはない。この廊下の様子だと、北から南に回ったということだから、うん　　問題ない。」

進もう」

わけがわからない。義男は思う。こんなのは茶番にすぎない。地図さえ埋めていけば、床が回転した程度では全く支障はないはずだ。なら何が問題になるのだろうか。問題は、この地図がもうじき完成されるということではないだろうか。

ここからできることができるようになる。ここから出たい。元の日常生活に戻りたい。そう思う。

本当に？

迷路徘徊は結局地図に袋小路を足したただけで終わった。

勉と留美子は互いの裸体を寄せ合っていた。二人ともたばこを吸い、快楽後の余韻に浸っている。時刻はすでに六時を回っている。今日は迷路を回るようなことはしないで、そのまま寝てしまうことにした。

「あんた、満男って奴といつから友達なの？」

「中学生からかな。クラブ帰りにこんな目にあつた。あのときはいい女と一緒に歩いてたよ。満男も珍しく女をゲットして、気持ちのいいことをしようとしてたのによ」

「へえ。いいところを邪魔されたんだ」

「早く外に出たいな」

「当然でしょ」

「明日また迷路に行つてみるよ」

「あたしの地図貸すから。埋めといてね」

へえ。地図なんて書けるのか。なかなか立派なもんだ。

「あたしね、実はここに来られた理由、なんとなく想像ついてるんだ」

え、と勉は彼女の顔を見た。

留美子は謎めいた笑みを浮かべ、布団から出た。

「どうしたんだよ？」

「部屋に戻るの。あんたとしたつて一応、秘密にしときたいし」

「なあ、ここにきた理由って何なんだ？」

「過去、だよ」

過去。

「あたしだけじゃないよ。全員のね。あんたも、ね。わかってるんじゃないの？」

留美子は出て行った。

過去の秘密。そうかもしれないな。

勉は起き上がる。過去の影が、果たしてこの結果を招いたのなら……。だが、何故今更なのだろうか。

それに、何故留美子はわかったのだろうか。それはつまり、あの女も、犯したことがあるということだ。

何を？

たぶん、殺人を。

二人の過去

勉と満雄は二十歳の頃、轢殺を犯している。暗い田舎道、満雄の運転で二人は激しい曲を大きな音で鳴らしながら走っていた。スピードもかなり出ていたし、酒も少し入っていた。勉自身は酔いの心地よさに浸って半ば眠っていたが、満雄は少し酒を飲み過ぎていたし、雨が降っていて視界も悪かった。

木々が立ち並ぶ田舎道を車は進んでいた。

衝撃があつた。そして急ブレーキ。勉は跳ね起きた。何かと満雄を見る。満雄は明らかに動揺していた。

窓には血がついている。

勉は状況を整理する。何かを轢いたのは、間違いないだろう。あの音と衝撃はそういうことだ。きっと動物だろう。大きな動物。鹿か、猿か、猪か。こんな田舎道なものな。

「やべえよ……俺、人轢いちまった」

満雄の告白に勉は全身が凍り付いた。

「本当かよ」

勉は慌てて外に出た。車の前には、レインコートを羽織った人間が倒れていた。

馬鹿な。

勉は倒れている者に近付き、顔を覗いた。初老の頬の瘦けた男に見える。

駄目だ。目が開いていて、動かない。つまり、生きてはいないということ。

降りてきた満雄もそれを確認していた。そして彼は泣き始めた。

「畜生、やっちゃまった！ 酒も飲んでる。完全にこつちが悪い！ スピードもバンバンだしてた……俺は犯罪者だ」

満雄の取り乱し様子を見て、勉は少しずつ冷静になっていた。いや、車を降りる前からこう思っていたのだ。もし、轢いてしまった

としても、この場所なら一目がつかない。誰も目撃者なんていない。だったら、まだまだ救いはある。

「俺の言うことを聞け。この死体を埋めるんだ。そこらの林の中にな。車はその空き地に置いておこう。素早くやるぞ。この雨だ。車道の血は洗い流されるだろう。急げ！」

死体は深くは埋められなかった。見つかる見つからないは問題ないと勉強は思っている。発覚は遅ければ遅いほどいいが、数日もつてくれればいい。ここは地元からだいぶ離れている田舎だ。接点は薄い。目撃者さえ出なければ、満雄の車を疑うなんて者は現れないだろう。

車に戻るとほっとする。

「いいか、道を変えて、街のほうから帰ろう。俺たちは今日ここにはこなかった。いいな？ 街で遊んで、それから帰った。車には傷はついていない。血の跡もついてない。大丈夫。俺たちは人なんて轢いてない。わかったな」

「ああ……」

満雄の声が弱々しすぎるので勉強は不安になる。怒りが募る。満雄の頭を殴る。

「なんだよ！」満雄の叫び声は弱々しかった。

「いいか、てめえにかかっているんだぞ！ 捕まるのは俺じゃねえ。てめえだ！ 俺が尻ぬぐいしたんだ。わかってんだろうな。これで捕まったら人生終わりだぞ。豚箱での生活を味わいたいのかよ」

「い、いやだ」

「なら俺の言うとおりにしろ。これからずっと、今日のことは内緒だ。俺と一緒にするときもその話はするな。墓場まで持って行く、俺とお前だけの秘密だからな」

満雄は何度も何度も泣きながら頷いた。

過去の話だ。だいたいなんでここに連れてきた連中は俺たちのことを知っている？ ありえない。目撃者なんていなかった。いや、

いなかったはずだ。もしばれたとしたら、それは自分のせいじゃない。満雄がへましたんだ。あの野郎、誰かにばらしやがったのか？
ありうる。あれはへたれだし、逆境に弱い男だったから。

腹が立ってきた。問い詰めてやってもいいが、きつと白状なんてしないだろう。わかっているのだろうか。自分の罪を認めても、結局後悔するのは自分でしかない。ならば、そのことを忘れて、第二の人生を送ればいいのだ。九死に一生を得たのだ。これからはもっと慎重に行動できるはずだ。

満雄はあまり変わらなかった。前と同じく、馬鹿をした。勉が戒めのために轢殺のことをほのめかしたときだけ大人しくなったが、それ以外は相変わらなくて、昔と変わらなかった。そのことが勉には気に入らないところであった。反省するということを満雄は知らない。仕事にしても喧嘩やトラブルを起こして辞めてしまふ。だから満雄はいまだにバイトだ。女を殴ることもあった。レイプまがいのこともしたこともある。馬鹿なのだ。勉は、自分がいないと満雄がただの駄目人間になると思っている。友人というよりも、保護者のようなもの。二人だけの秘密を誰にも漏らさない意味でも、その関係は続けている。

だが人を轢いているのだ。もっとそのことをはつきりと受け止めるべきだ。人一人、殺しているのだから。故意ではないかもしれない。しかし、だからといって……。

ノックがする。開けると、満雄だった。

「何だよ？」

「別に。暇だからきてやったんじゃねえか」

留美子が帰っていて助かったと勉は思う。

「留美子を今からセックスにでも誘おうかと思ったけど、もう時間がやばいしな。九時以降は出歩くなつてね」

「じゃあなんで俺のところに来たんだよ？」

満雄は愉快そうな笑みを浮かべる。

「俺とお前で化け物退治、やらねえか？」

怪物の正体

化け物ねえ。勉は少し呆れながらも、結局満雄についていくことに同意する。昼にあの沢登の変人が言ったという言葉以来、少し気になってはいた。九時過ぎて徘徊したら、現れるのだろうか。ミノタウロスか。半分牛の人間なんてありえないが、そんな格好をした存在がうろついているというのはありえる。こちらをびびらせようって魂胆だろうが、そんなものに驚くか。むしろ訓練された犬のほうが怖い。

「そうだ、田辺を呼ぼう。あいつならついてきそうじゃないか」満雄が提案する。

「野々宮って女のところにしけこんでなければな」

義男の部屋を二人はノックした。しかし、反応はない。

「寝てるのかね。まあいいや。二人でいこうぜ。加藤のおじさんは頼りになりそうだけど、どうする？」

「いいよ。御老人に無理はさせたくねえ。二人でやろう」

二人はそれぞれ金属バットを持って、迷宮内に入った。

色々入り組んでいるが、別に出口を探すのが目的じゃない。コピーした地図を頼りに二人は進んでいく。目的は化け物退治だが、満雄がどこまで本気なのか勉は気になった。

バットでは心許ないのではないかとも思うが、それ以上の武器もない。仕方がない。

「おい、あんまり闇雲に行く道に迷うぞ」

「俺、結構頭いいんだ」

満雄は壁を指さした。勉はそこにマジックペンで書かれた矢印を発見した。

「迷ってもこれを辿れば帰れるって寸法だ」

「だけどこれ、全部網羅してるわけじゃないんだろ」

満雄は勉の肩を二度叩いた。

「そりゃあそうだけど、そんな奥まで行かないから安心しろって」
勉は満雄のことなんてほんの少しも信用していない。勉自身は何度か迷路を彷徨っていたのである程度の道筋は記憶しているが、通過したことのない道まではわからない。

「怪物なんているわけねえよな」満雄が言う。
「当たり前だ」

勉は怪物なんて信じない。そんな存在がいたら、自分の中の価値観がひっくり返るかもしれない。だけど、そんなことはありえない。怪物なんていないからだ。

道を適当に進む。

「おい勉……俺達って結構、いろんなことしたけど、やっぱりこれって天罰なのかなあ」

「やめろ」勉は激しい勢いでぴしゃりと、満雄を制した。

こんなところであるときのことをほじくり返そうっていうのだからか？ 満雄の馬鹿。誰が聞いているかわかったものではないし、声だつてここの監視者に拾われているかもしれないだ。迂闊なことはいえない。

「悪いな」満雄は謝るが、明らかに機嫌が悪そうだ。

勝手な奴だと勉は思う。満雄といると悪いのは満雄ではなくて自分なのではないかと思えてくる。轆いてしまったのは満雄ではなく自分だと。

脳気な満雄が羨ましかった。あの事件のことは二人のときも、一言も喋らない。墓まで持って行く。そういう約束のはずなんだ。それなのに。

「まあ、俺も悪かったよ」

何が！ 勉は激昂しそうになったが、なんとか自分を抑えた。

「とにかくやめろ」勉の声は厳しいが、次に優しい口調になる。

「なあ、怪物退治なんだろ？ 早いところ化け物を倒そうぜ」
満雄は黙った。勉は少しほっとした。

そうして歩くこと数分後、とうとう怪物が姿を現した。

満雄と勉は人型の怪物を発見したと思つたとき、素早く手にする得物を構えた。

しかし、二人は目の前の存在の正体をよく見て、白けた。

怪物ではなかった。人だ。刺の生えた棍棒を手にし、小学生の演劇で使うような牛の仮面を被つた男が立っている。男の身なりから、二人には正体がわかつた。よく見ると棍棒もプラスチックだ。刺もただの紙作りのようだ。

「沢登さん、何やってるんだ」満雄が言った。

牛の仮面が取れ、沢登の顔が現れた。

「あんた、マジで何してんだ」勉が呆れ声を出す。

「俺は沢登じゃない。ミノタウルスだ。神は俺を半牛に変えた」

二人は顔を見合わせた。満雄が自分の頭を指さし指を二回転させた。勉は沢登の行動をどう受け取つていいのかわからず、戸惑う。

「まあ、大丈夫。悪いようにはしない。お前たちも我を崇めよ。さすれば牛神の加護がくだされる。我は牛神。人ではない。よつて我が怪物に襲われることはないだろう」

半牛は手にした棍棒を二度ほど掲げると、いきなり走り出し、どこかへ行つてしまった。

勉が嘆息する。

「戻ろうぜ。怪物の正体はあいつだ」

「だけどあいつ、変だ。俺にはあいつが自分の恐れから逃げるために自ら怪物のふりをしているように見えるね」

勉は満雄が少しわかつたふうな口を聞いたのに苛ついた。

「あいつはいかれてんだ。真に受けんな。行くぞ」

勉は帰る途中、牛の仮面と沢登の鬼気迫る顔を思い出して何度も嘔き出した。

復讐

瑠美子はぼんやりと、一人孤独の部屋にいた。わかっているのは、ここにいる連中は全員、胡散臭いということ。全員ここを出たいと思っっているのはわかるのだが。

やることがないと昔のことが蘇る。幼年時代、少女時代、大学生のとき。だが大したことは思い出せない。良い記憶も悪い記憶も男女の交わりのことだけだ。ため息が出た。

彼女は、ひよつとしたらと漠然と思っていたことがあった。

過去の影が、今になってやってきたとしたら。

瑠美子は看護婦をしていた。あの婆さん、西岡も看護婦をしていたと言っていた。類似点に引っかかりを覚えた。

ここにいる者達が自分と同じようにとあることをした者同士なら、少なくとも八人に共通点が生まれるのだ。

全員が殺人を犯しているとすれば。

瑠美子は人を殺している。過去に、一度。

あれは看護婦時代のときだ。今はスナックで働いているのだが、忘れもしない、看護婦時代の頃自分が犯した犯罪を。

しかし瑠美子自体はなんとも思っていないかった。そのことを罪だとも思っではない。

あれは……そう、仕方のないことなのだ。

八年ほど前、瑠美子は強姦された。相手は見知らぬ男。仕事帰りに跡を付けられていたのだ。痴漢撃退スプレーは持っていたが、役には立たなかった。鞆を探る暇はなかったからだ。

郊外の路地裏で彼女は腹を殴られ、弱ったところで慰み者にされた。満足すると男は去っていった。男が早漏だったのは少しだけ救いだっただ。

瑠美子は嘆いたが、このままで終わらせてなるものかと思った。相手が憎かった。やがては風化し全てが虚しく思う日がくるのだが

そのときの瑠美子は心の中に報復の二文字を刻み込んでいた。

相手の顔は覚えている。うつすらと頭が薄くなり始めている三十代と思わしき小男だ。だが肩幅はあり、腕も太く、力には自信があるのだろう。瑠美子は来る日も来る日もレイプされた周囲を見張り、憎き犯罪者を見かけの心を待ちにした。しかし、成果はなかった。大体、彼を見つけてどうするのだろうか。殺す？ しかしそんなことをしたら悪いのは自分だ。見つけ次第警察を呼べばいいのだろうか。しかし立証はできるのだろうか。そんなことを考えていたが、男は現れない。やがて瑠美子は徘徊するのを止めた。だが憎悪の火は燻ってはいるが消えることはなかった。

そんなとき、神が自分にチャンスを与えてくれたのではないか思える彼女にとつての奇跡が起こった。瑠美子の勤める病院に瑠美子を犯した男がやってきたのだ。どうやら飲酒運転で大通りに飛び出し、走っている車の横に激突。相手は死に、男も意識不明の状態だった。

あらゆる処置を施し、男は一命を取り留めた。明日には意識も回復するだろうとのことだった。

瑠美子はそれに喜んだ。男は死ななかった。死んで欲しいなんて思っただけだった。自分が殺すからだ。

誰もいないのを確認し、大量の静脈麻酔薬を注射。瑠美子は自分のやっていることに興奮し、その場で笑い転げそうになった。どう考えても致死量という量をさらに超えた量を投入したのだ。絶対に助からない。

男の目が見開き、瑠美子を見た。瑠美子は興奮状態なので壊れた顔で相手の顔を見た。

「お前は……」

「死ね」瑠美子は言った。

そして彼女はその場を離れた。すでに自分の勤務時間は過ぎていて、いったんは帰宅をするふりをしてみせたのだ。他の看護婦に見つからないよう変装している彼女はなるべく同僚に見つからないよ

うそそくさと病院を離れた。家に戻るさい、彼女は笑いを堪えるのが大変だった。

結局男は死に、病院側は困惑した。医師も何かおかしいということに薄々気付いていたのだろうが、男は救助空しく結局死んでしまった、ということになった。看護婦の中でも妙だと思っっている者は多かった。

解剖もされず、男は火葬になったようだ。瑠美子はこれほど自分が運がいいとは思えなかった。こんなことが再び起きるなら、またレイプされてもいいと思つた。また、人をあんなふうに殺せて、なおかつ罪にならないのなら。

だが瑠美子はそれから看護婦という職は自分のような冷酷な女には合わないということ結論に至り、仕事を辞めている。薬物投与を疑われたことはないが、いつかはばれてしまうのではないかと思う気持ちもわずかにあつた。

それからはスナックで客人と接しているわけだが、これはクラブほどではないがそれなりにお金がいいから気に入っていた。ごくたまにある客のセクハラに耐える程度は瑠美子にとってわけないことだった。仕事をしているとき、アパートにいるとき、瑠美子は麻酔を注射したときのことを思い出し、一種の快樂状態になる。だがそんな自分が怖くもあつた。殺人は違法であり、罪であり、人の道から外れる行為である。それから瑠美子は少しだけ自分の生活や思考を変えてみようと読まない本などに手を出してみたり、ジムに通ってスポーツに励んでみたりした。元々金とセックス以外はさして興味もなかった彼女は少しずつ変わっていった。

だが、今になって彼女は昔の罪は償わなくてはならないのだろうか、ここにきて思つた。女を強姦し、人を殺した相手だ。死んで当然だろうに。私は何故こんなところにいるんだろう。

少し、涙が出た。中学生以来だ。泣いたのなんて。瑠美子は涙を拭つた。

ここは、断罪の場なのだろうか。それともこの牢獄のような場所

で自分の罪を考えるための場なのか。改悛せよと？

「ミノタウルスって何なの」瑠美子は呟く。

きつとそれ自体に意味なんてない。瑠美子は初めからそう思っていた。ミノタウルスがいるとすれば、それは自分のような罪人のことを指すのかも知れない。

沢登のいう化け物が実際にいても楽しそうだ。

瑠美子は部屋を出た。時刻は夜の七時半。食事はすでに摂った。憩いの場に行けばどうせ何人かはいるだろう。勉が自分と寝たなんてことを誰かに漏らしてなければいいが。

今の状態は酷いが、もつといい男がいれば少しは違う。田辺義男という男はどうだろう。首を振る。きつと性に関して奥手であろう。まだ勉のほうがまだ。満雄は論外。

廊下を歩き、瑠美子は憩いの場の扉を開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5035y/>

ミノタウルス

2012年1月5日01時50分発行